



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	ゲルマン語の歴史と構造(5) : 現代ゲルマン諸語
Author(s)	清水, 誠
Citation	北海道大学文学研究科紀要, 137, 23(左)-83(左)
Issue Date	2012-07-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/49815
Type	departmental bulletin paper
File Information	4_SHIMIZU.pdf



ゲルマン語の歴史と構造 (5)

— 現代ゲルマン諸語 —

清 水 誠

Structure and Development of the Germanic Languages (5)

— Modern Germanic Languages and Dialects —

(*The Annual Report on Cultural Science* No. 137. Graduate School of Letters, Hokkaido University. Sapporo/Japan. 2012. ISSN 1346-0277)

SHIMIZU, Makoto

(mshimizu@let.hokudai.ac.jp)

IV. 現代ゲルマン諸語

1. 現代ゲルマン語の仲間たち — 「言語」と「方言」を分けるもの

ここからは重厚な古語の歴史的遺産を後にして、近現代の世界に旅立とう。
おもな現代語を表にまとめると、次のようになる¹。

(1) 北ゲルマン語

(a) 大陸北ゲルマン語

スウェーデン語

デンマーク語

¹ この表は拙稿「ゲルマン語の歴史と構造 (1) — 歴史言語学と比較方法 —」(2010: 6)の修正版である。以下の説明はこの修正版に基づいて行う。

ノルウェー語ブークモール

ノルウェー語ニューノシュク

(b) 離島北ゲルマン語

アイスランド語

フェーロー語

†ノーン語

(2) 西ゲルマン語

(a) ドイツ語

ルクセンブルク語

[低地ドイツ語]

[スイスドイツ語]

[ドイツ語アルザス方言]

イディッシュ語

[プラウトディーチ語]

[ペンシルヴェニアドイツ語]

(b) オランダ語

[オランダ語フランドル方言 (いわゆるフラマン語)]

アフリカーンス語

(c) 英語

(スコットランド英語, アイルランド英語; イギリス英語, アメリカ英語, オーストラリア英語など)

(d) フリジア語群

西フリジア語

北フリジア語

東フリジア語 (=ザーターフリジア語)

(e) クレオール諸語

現代語を語るときに避けて通れないのが「言語」(language)と「方言」(dialect)の問題である。上の表では、方言または特異な性格の言語はカッコ

に入れてある。海拔が低い北ドイツの広い地域で用いられる低地ドイツ語と最南部のアルプスの麓に位置するスイスドイツ語は、ともに慣例による通称であり、本来は「ドイツ語低地方言」、「ドイツ語スイス方言」がふさわしい。両者は北フリジア語とともに標準語を欠く諸方言の集合だが、標準ドイツ語から一線を画する独自の特徴を備えている。西フリジア語も、オランダ北部のフリースラント州の地域的公用語にとどまり、オランダ全土で通用するわけではない。「言語」としての性格が特殊な例には、16 世紀前半以来のメノ(＝メノー)派教徒の東方移住で低地ドイツ語から発達したブラウトディーチ語、17 世紀後半頃にドイツのプファルツ地方からアメリカ・ペンシルヴェニア州を中心に移住した中部ドイツ語を基礎とするペンシルヴェニアドイツ語がある。ドイツ系ユダヤ人の母語であるイディッシュ語に至っては、後述するように、ゲルマン語ではないとする意見すらある。

ルクセンブルク語も長らくドイツ語の一方言だったが、1984 年の言語法で「言語」の地位に昇格した。ただし、これはきわめて稀な例外である。6 千余りともいわれる地球上の言語の中で、話者数が 100 万人を越えるのは 250 余りで、全体の 4 %程度にすぎず、人類の約 96%がこれを用いている。残りの約 96%の言語の話者を集めても、約 4 %にしかない。世界の言語の約半数は話者数が 1 万人以下の危機言語で、約 2 週間に 1 言語の割合で消滅しつつあるともいわれている。少数言語の話者は日常的に種々の不利益を被っていることが多い。ヨーロッパのゲルマン語では、北および東フリジア語が危機言語に数えられる。100 年後には世界中の約半数の言語が失われ、最悪の場合には 10～5 %しか残らないとする予測もある。アメリカのある大富豪は北欧の永久凍土の奥深くに、絶滅に備えて地球上の全植物の種を貯蔵する計画を立てたというが、言語の場合には辞書と文法書を穴の中に放り込んでおいても、自然によみがえるわけではない。言語の消滅を環境破壊の一例とみなす意見もある。

19 世紀以降のヨーロッパでは、さらに 2 つ新しいゲルマン語が誕生している。2 種類のノルウェー語、ブークモールとニューノシュクがそれである。両者は 400 年以上の支配下にあったデンマーク語から保守的な前者と革新的

な後者に分かれて、19 世紀末に生まれた。ノルウェーの切手やクローネ紙幣には、ブークモールの Norge とニューノシュクの Noreg の 2 通りで「ノルウェー」と印刷されている。ただし、その差は微妙であって、r と g がひっくり返っただけでは、別の言語であるとはにはわかには信じがたい。スウェーデン語とデンマーク語を加えた 4 つの大陸北ゲルマン語は、たがいによく似ている。スウェーデン語の ä, ö にたいして æ, ø の文字を使うデンマーク語とブークモールは、書面では判別がつきにくいことすらある。それでも、この 4 言語を方言だという人はいないし、要人が公の席でまじめにいったら、大変なことになるだろう。

言語と方言の違いは、構造的相違よりも政治的・社会的理由、すなわち「社会言語学」(sociolinguistics)的な要因に依存している。この点が重要視されるのはヨーロッパ諸言語の特徴といえる。ヨーロッパでは話者が自分たちのお国言葉を「言語」であると公的に強く主張すれば「言語」になり、しなければ「方言」の地位にとどまるか、「言語」から「方言」に格下げになる可能性もある。政治的・社会的に有力な「威信方言」(prestige dialect)は周辺の方言を包含するなどして「標準語」(standard language)となり、「言語」の地位を獲得した。ヨーロッパの人々は言語の社会的地位という問題に敏感である。言語は空気のような自明の存在ではなく、頻繁に意識にのぼる風や嵐のような明確な実体なのである。

ほかにも言語構造上、特筆すべき方言は少なくない。数例を挙げると、まず、中世期には東ノルド語の一員で、独立の言語だった「スウェーデン語ゴトランド方言」(ス gotländska)がある。次に、民俗学の宝庫として知られるスウェーデン中部のダーラナ地方北部で、話者数約 3 千人と推定される「スウェーデン語エルヴダーレン方言」(ス älvdalska)は、名詞に男・女・中の 3 性と主格・対格・与格・属格の語形変化による 4 格組織を保つなど、驚くべき保守的特徴から、つとに注目されている。「デンマーク語西ユトランド方言」(デ vestjysk)は北ゲルマン語に特徴的な後置定冠詞を持たず、西ゲルマン語のような前置定冠詞を発達させているが、冠詞などの限定詞による名詞の両性・中性という性の区別を廃して、代名詞との照応によって可算・不可

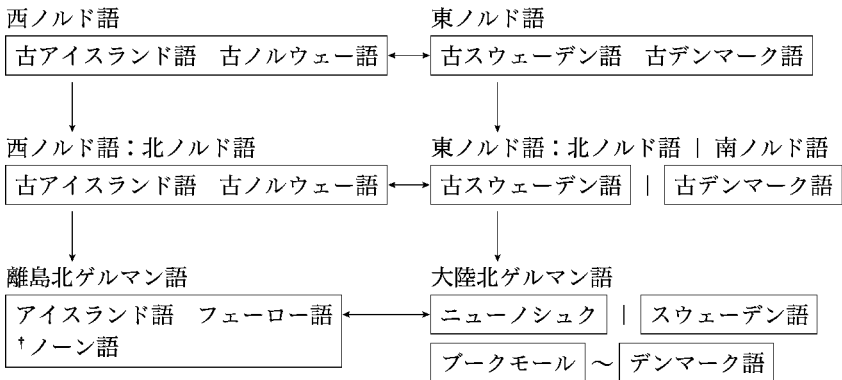
算という新しい区別に転換したユニークな存在である(リングゴー(清水訳)1995:62 ff.)。さらに、イタリア北東部の都市トレント(イタ Trento)に近いルゼルナ村(イタ Luserna)を中心に話されている「上部ドイツ語ツインバーン方言」(ド Zimbrisch)は、イタリア語などの影響を受けて、西ゲルマン語の大多数に共通の「定動詞第2位」の原則を英語と並んで失った珍しい例である(Tyroller 2003, Bidese 2008)。

最後に、「クレオール諸語」(creoles)は世界各地で系統の異なる現地の言語と混ざり合い、独自の言語に成長したものを指す。英語またはオランダ語を基礎にした40~50種類が知られている。ただし、南アフリカ共和国とナミビアで用いられているアフリカーンス語をその一例とみなすことには、慎重さが求められる。

2. 北ゲルマン語の仲間たち — スカンジナヴィア本国と離島の言語

2.1. 北ゲルマン語の変遷 — 東・西から大陸・離島の区分へ

それでは、白夜の北欧スカンジナヴィアから出発しよう。ヴァイキング時代末期に顕著になった東ノルド語と西ノルド語への分岐以降、大陸北ゲルマン語と離島北ゲルマン語の類型論的区分に至る道程には、次に述べる出来事が待っていた。



まず、北ゲルマン語地域の南部で語末音の弱化和形態的簡素化が起こり、12世紀頃には当時、デンマーク領だったスウェーデン南部を含むデンマーク語が「南ノルド語」(South Nordic)として、その他の「北ノルド語」(North Nordic)から異なる性格を得た。これには南に接する低地ドイツ語の影響が指摘されている。デンマークとドイツの国境は古来、一定せず、1920年の国民投票の結果、シュレースヴィヒ地方が南北に分かれて両国に分属することになった。ほかにも、デンマーク語は語頭以外での p/t/k の軟音化(有声化と摩擦音化)、高さアクセントに代わる声門狭め音(声門閉鎖音)など独自の特徴を発達させている。

13～15世紀には「ハンザ同盟」(ド Hanse)の興隆に伴う北ドイツ商人の進出を経験した。低地ドイツ語の前身である中低ドイツ語から大量の語彙が流入し、書き言葉にも影響を与え、1350年頃にその頂点に達した。現代大陸北ゲルマン語の日常語彙の30～40%は低地ドイツ語起源ともいわれている。バルト海に面する北ドイツの世界遺産都市リューベクを盟主とするこの経済共同体の言語は、ネーデルラントから北海、バルト海沿岸地域一帯のリングワ・フランカ、すなわち共通の意思疎通手段となった。これはドイツ語が他の言語に与えた最大の影響とされている。コペンハーゲン、ストックホルム、オスロ、ヘルシンキなど北欧の沿岸部を中心とする主要都市は、北ドイツ商人がこの時代に発展させた。その旧市街にはドイツ教会がそびえ、ベルゲンの旧市街にはハンザ商館が建ち、最初のストックホルム市長の職にはドイツ人が就いた。行政職にもドイツ人が名を連ねた²。

デンマーク語に続いて、スウェーデン語は14世紀半ば、ノルウェー語はその1世代ほど後に語末母音を弱め、それぞれ大幅な形態的簡素化を被った。一方、アイスランド語とフェーロー語は古風な性格を保った。この結果、前者の「大陸北ゲルマン語」(Continental North Germanic)と後者の「離島北ゲルマン語」(Insular North Germanic)という類型論的基準に基づく新

² 北ゲルマン語、とくにスウェーデン語に与えたドイツ語の影響については、清水(1983)参照。

しい区分が誕生した。

以上の事情に加えて、スカンジナビア内部の政治情勢の変遷がある。キリスト教改宗、16世紀の宗教改革とそれに続く絶対主義王政、19世紀ロマン主義とナショナリズム（国民主義）をキーワードとして、以下に概観してみよう。

2.2. デンマーク語とスウェーデン語 — 覇権争いと規範整備

スカンジナビアでは海を媒介として、10世紀頃に諸部族の統合から3王国が成立した。北海を中心にバルト海の出口を押さえたデンマーク、ノルウェー海を中心に西部のフィヨルド海岸部を拠点として発達したノルウェー、バルト海を中心に中部のメーラレン湖（ス Mälaren）周辺を支配したスウェーデンがそれである。北ゲルマン語圏では独自の信仰が根強く、ドイツ王国による支配への警戒心も強かった。キリスト教化は「スカンジナビアの使徒」と称えられた^たアンスガー（Ansgar 801～865）の努力もむなしく、王侯の支持を受けた10世紀後半から12世紀末という長いプロセスの末に達成された。政治的支配も同時に象徴する大司教座の設置は、デンマークでは1104年に現在はスウェーデン領南部のルンド（ス Lund）、ノルウェーでは1152年に中部のトロンハイム（ノ Trondheim）の前身であるニーダロス（ノ Nidaros）、スウェーデンでは1164年に中部のウプサラでなされ、それぞれ北欧を代表する大聖堂が建立された。

「デン人（dan-）領土（-mark）」を意味する「デンマーク」（デ Danmark）は、960年頃にハーラル青齒王（デ Harald 1 Blåtand ?～987）がローマカトリックに改宗し、11世紀前半にはデン朝イングランドに加えてノルウェーを征服した。ヴァイキング時代の終焉^{しゅうえん}でこの関係は解消されたが、ドイツとの抗争を経て14世紀半ばには復興を遂げ、女王マルグレーテ1世（Margrete 1, 1353～1412）の統治下の1380年にアイスランド、フェーロー諸島、グリーンランドを含むノルウェーを支配した。1397年にはバルト海沿岸の古都カルマル（ス Kalmar）で「カルマル同盟」（Kalmar Union）を締

結し、スウェーデンを含む北欧連合王国の中心として君臨した。マルグレート 1 世は 14 世紀末に公文書をラテン語からデンマーク語に改めさせてもいる。デンマーク語はノルウェー語、フェーロー語、アイスランド語を傘下に置き、前者の 2 言語の歩みに決定的な影響を与えた。

16 世紀前半の宗教改革の時代に入ると、ヴァーサ王朝の創始者グスタヴ 1 世 (Gustav 1, 1496～1560)、すなわちグスタヴ・ヴァーサ (Gustav Vasa) のもとで、スウェーデンの台頭を迎える。1523 年にスウェーデンはデンマークへの従属を断ち切り、カルマル同盟は解消された。1524 年の新約聖書のデンマーク語訳に続いて、1525 年以降は近代デンマーク語の時代に入り、1550 年には『クリスチャン 3 世欽定訳聖書』(デ *Christian 3.s Bibel*, 正しくは「クレスチェン」) が完成した。そして、絶大な国民的人気を誇ったクリスチャン 4 世 (Christian 4, 1577～1648, 親政 1596～1648) の統治期を迎える。しかし、三十年戦争で敗北し、1658 年にはスカンジナビア半島南部のスコーネ(ス Skåne)、ハッランド(ス Halland)、ブレーキング(ス Blekinge) をスウェーデンに割譲した。この地の言語はスウェーデン語南スウェーデン方言と呼ばれ、r は舌先ではなく、口蓋垂の摩擦音であり、二重母音が多いなど、標準スウェーデン語とは異なる特徴を随所に示している。景観の点でも、森林に囲まれてひっそりとたたずむスウェーデン的な赤壁と白の窓枠の一軒家とは一味違って、積み木の箱をひっくり返したようなカラフルで愛らしい木組みと漆喰^{しっくい}を合わせた家並みが印象的である。

現在のデンマーク語(デ dansk)は、宗教改革期に誕生した書き言葉に、17～18 世紀のコペンハーゲン市民の話し言葉を交えたものを標準語の基礎にしている。話者数は約 550 万人で、コペンハーゲンを東端とするシェレン島(デ Sjælland)、アンデルセンの故郷として有名なオーゼンセ(デ Odense)を中心都市とするフューン島(デ Fyn)が主要な 2 島に数えられる。大陸部の国土は、北シュレースヴィヒ(ド Nord Schleswig, デ Nordslesvig 「北シュレースヴィ」)以北のユトランド半島であり、同国第 2 の人口を有する東部の都市オーフス(オーフス, デ Århus)や 700 年頃に礎を築かれた国内最古の西部の都市リーベ(デ Ribe)などが位置している。言語的特徴も、大陸方

言と島方言とではかなり異なっている。デンマーク語はドイツとの国境を越えた南シュレースヴィヒ (ド Südschleswig, デ Sydslesvig 「南スレースヴィ」) にも話者がおり、グリーンランドとフェーロー諸島の公用語にもなっている。

スウェーデンは中部のスヴェーアランド (ス Svealand), 南部のイエータランド (ス Götaland), 北部のノルランド (ス Norrland) からなる。ノルランドはノルウェー最北部と並んで、フィンランド語やエストニア語と同じく、ウラル語族のバルト・フィン諸語に属するサーミ語の主要使用地域でもある。スウェーデン語 (ス svenska) の古来の中心地は中部のスヴェーアランドで、「スウェーデン」の原語 Sverige 「スヴェリエ」は「スヴェーア人の (Sve-<Svēa) 国 (-rige<rike)」の意味である。標準語は、北欧最古の大学町ウプサラや首都ストックホルムを含むメーラレン湖周辺とウップランド地方の方言を基盤としている。国土は日本の約 1.2 倍の面積に及ぶが、話者はスウェーデン本国で約 940 万人の 90% 程度にとどまる。残りの人口は近年の移民で占められ、その多くは第 2 言語としてスウェーデン語を用いている。デンマークとノルウェーでも同様の移民が多い。スウェーデンでは、他の北欧諸国と共通して寛容な言語政策が取られており、充実した社会制度を通じて知名度が高い。

スウェーデンでは異教信仰が根強く、11 世紀半ばにイエータランドでキリスト教改宗がなされてからも、中部のスヴェーア人はこれに従わず、ウプサラで異教徒の神殿を破壊した後の 1164 年に、司教座が置かれた。1526 年の新約聖書訳を境に、近代スウェーデン語の時代に入り、グスタフ 1 世の命で 1541 年に編まれた『グスタヴ・ヴァーサ欽定訳聖書』(ス *Gustav Vasas Bibel*) の全訳によって、書き言葉の規範整備が途についた。1732 年頃以降は、ドイツ語の影響を脱し、スウェーデン語的な書き言葉への転換がなされていった。

ヴァイキング活動が終焉を迎えた時代を経て、新たなスウェーデンの進出に伴う言語的影響をとどめる地域に、フィンランドがある。スウェーデン語

は同国の公用語でもあり、30 万人弱の話者がいる。この「フィンランドスウェーデン語」(ス finlandssvenska)の話者は、ノヴゴロト公国と対抗して行われたキリスト教布教活動による 12 世紀後半の南西部の改宗を起源とし、1809 年まで続いたスウェーデン支配下の居住民の後裔である。ムーミンでおなじみの女流作家トゥーヴェ・ヤーンソン (Tove Jansson 1914~2001) も、フィンランドスウェーデン人であり、スウェーデン語で作品を発表した。言語的特徴としては、標準スウェーデン語の「高さアクセント」を欠き、「音節均衡」の制限を受けない古来の音節構造を残すなどの点がある。使用地域は南海岸と西海岸中部の沿岸、くわしくいうと、ヘルシンキ周辺のニューランド地方(ス Nyland)、ヴァーサ(ス Vasa, フィ Vaasa)周辺のエステルボッテン地方(ス Österbotten)、オーボ(ス Åbo, フィ Turku「トゥルク」)周辺のオーボランド地方(ス Åboland)、それにオーランド諸島(ス Åland)である。オーランド諸島は自治権を有し、スウェーデン語を唯一の公用語としている。

2.3. ノルウェー語——ブークモールとニューノシュクの誕生

上記の 2 王国が 16 世紀前半にルター派新教への改宗に伴う聖書の翻訳を通じて近代語的な書き言葉の基盤を固め、絶対主義王政の確立によって北海・ノルウェー海とバルト海の覇権を掌握したのにならして、ノルウェー(ブ Norge, ニュ Noreg)は長らく陰の道をたどった。国名の由来は「北の(古ノ norð)+道・地方(古ノ vegr)」である。

アイスランドやフェーロー諸島のキリスト教改宗にも尽力したウーラヴ 1 世トリュグヴァソン(ノ Olav 1 Tryggvason 968~1000)³は、デンマークとスウェーデンの策謀で暗殺された。その遺志を受け継いだ聖ウーラヴ(ノ Olav den hellige 995~1030)の名で知られるウーラヴ 2 世(ノ Olav 2 Haraldsson)は、1024 年にノルウェーキリスト教会の基礎を築いた。その後、13 世紀のノルウェー王国は、1262 年にアイスランドを併合するなど、北欧の

³ 以下の人名はノルウェー語による表記で示す。Olav の o は [u:] である。

強国として繁栄した。しかし、1349年に、西部に位置する古来の中心地ベルゲンの港に入ったイギリス船から、ペスト菌が侵入し、やがて国内に蔓延した。総人口30～45万人の約3分の1までもが犠牲になり、続く半世紀には14～20万人に半減して、ノルウェーの国力は著しく衰えた。1380年にデンマークとの同君連合に入った後は、デンマーク語の影響が急増し、16世紀初頭には書き言葉の地位をデンマーク語に譲って、ノルウェー語 (norsk) は公的役割を失った。この状況は、デンマークとの連合関係を解消し、スウェーデンとの同君連合に入った1814年まで続く。スウェーデンからのノルウェーの独立は、1905年のことである。ただし、ノルウェー語は民衆の間で話し言葉として生き続け、多様な方言を育む一因ともなった。人々はデンマーク語の文章をノルウェー語の発音で読んだのであり、自由な話し言葉がノルウェー語的な書き言葉の基礎になった。これは「デンマーク語的ノルウェー語」の意味で、「ダンスク・ノシュク」(ノ dansk-norsk) と呼ばれ、以下に述べるブークモールに継承された。

1814年以降のノルウェー語復興運動は、2つの道を進んだ。そのひとつは、学校教師クニユート・クニユトセン (Knud Knudsen 1812～1895) に代表される穏健派である。その努力は、都市部の教養層の話し言葉をもとにノルウェー語的要素を取り入れ、デンマーク語の規範を改革した「リクスモール」(ノ riksmål, 「国の (riks-) + 言葉 (mål)」の意味) に結実し、広い支持を得た。1907年には、デンマーク語的要素を除去する大規模な正書法改革が行われている。

一方、急進的立場を代表するイーヴァル・オーセン (Ivar Aasen 1813～1896) は、ノルウェー各地の方言を広範囲にわたって調査した。そして、古風な特徴を豊富にとどめ、保守的性格が強い西部の方言を基盤として、古西ノルド語を継承するノルウェー語的な「書き言葉」を個人の努力で「再建」し、創造した。1864年の文法書と1873年の辞書で具体化されたその理想は、「ランスマール」(ノ landsmål, 「地方の (lands-) 言葉 (mål)」の意味) と呼ばれ、国民主義を標榜する知識人や政治家から強い支持を集めた。当初はかなり古風だったが、その後、実態に合うように種々の修正がな

された。

両者は1885年に、同等の社会的有効性を有する公用語として承認された。1929年にはリクスモールは「ブークモール」(ノ bokmål, 「文書・本 (bok) の言葉 (mål)」の意味)、ランスモールは「ニューノシュク」(ニ nynorsk, 「新しい (ny) ノルウェー語 (norsk)」の意味)に改称されて、現在に至っている。今でも、リクスモールはオスロの上流階級特有の保守的なブークモールを指すことがある。19世紀以降のノルウェー語は、ゲルマン語最多の正書法改革を経験し、規範整備が急ピッチで進められた。両言語の垣根を取り除き、「共通ノルウェー語」を意味する「サムノシュク」(ノ samnorsk)を構築する試みもあるが、両者を等しく容認する寛容さが現在の主流である。ニューノシュクが当初の過度に古風な性格を是正し、現状に即応するように修正されていったように、ブークモールもデンマーク語的性格から脱して、ノルウェー語としての独自性を加味し、ニューノシュク的な要素を取り入れていった。名詞の文法的な性 (gender) としての女性形の復活は、その一例である。

ブークモールとニューノシュクはともに国内全域で、公的機関での有効性が保証されている。学校教育ではどちらかが選択されるが、残りの言語も教えられることがある。両者の相互理解は、ある程度可能である。私たち外国人が学ぶのは、たいていブークモールである。話者は合計約500万人弱を数え、ニューノシュクは約17%で、西部の沿岸地域と南部の内陸地域を中心とし、ブークモールは約83%で、南東部のオスロ首都圏を中心に残りの地域で用いられている。ただし、方言の許容度が高いノルウェー語では、話者の70~75%がニューノシュクに近い方言を話しているともいわれている。ブークモールはスウェーデン語やデンマーク語に比べて、規範性がゆるやかな言語であり、話者もそのことを自覚している。北欧を旅行するなら、ノルウェーに限るという評判の高さを裏づけるように、入り組んだ地形が息をのむほど美しい雄大な自然景観を旅人の胸に刻み込むノルウェーは、方言分布が複雑多岐の様相を呈している。ノルウェー語は方言研究がとくに盛んで、概説書も豊富に出版されている。

標準発音については、ブークモールはオスロ首都圏を基盤とするが、ベルゲン、トロンハイムなどの地域的標準発音も存在する。一方、ニューノシュクは本質的に書き言葉であり、標準発音を欠いており、各地の方言の発音が許容されている。たとえば、ベルゲン周辺では、r はデンマーク語のように口蓋垂音なので、「舌尖ふるえ音 r [r]+s [s]」を [シ ʃ] と発音するブークモールのな *norsk* [ノシ(ユ)ク] 「ノルウェー語」にたいして、「ノルスク」となる。語彙についても、「選択形」(ノ sideform)と呼ばれる異形態が数多く許容され、テキストではかなりの異同が目につく。

2.4. アイスランド語 — ヨーロッパ言語の奇跡

中世のアイスランドは、999/1000 年のキリスト教改宗を経て、「共和制の時代」に自由を享受した。しかし、その末期には、8つの豪族が覇権を争う「ストゥルトルンガルの時代」(ア *sturlungaöld* 1200/20~64)に突入した。1262/64 年には、ノルウェー王に庇護を求めて属国に下った。1380 年にデンマークの支配に移行した後は、疫病や災害に悩まされ続けた。ヨーロッパ中を震撼させたペストの襲来で、1402~04 年には人口の 3 分の 1 以上が犠牲になった。1550 年には、ルター派新教への改宗を暴力的に強要されて教会財産を失い、1602 年には、通商権をデンマークに独占されて経済発展を道を絶たれた。暗黒の 18 世紀には、1783 年のラーキ火山 (ア *Laki*) の大噴火で有史以来最大規模の溶岩流が大地を覆い、アジアにまで達した火山灰が日射を遮って「^{かすみ}霞の大飢饉」(ア *móðuharðindi* 1784~85)を引き起こし、住民の約 4 分の 1 の命を奪った。デンマーク本国としても、全島民をユトランド半島北部に移住させる案を真剣に検討したほどである。ただし、アイスランド語 (ア *islenska*) はノルウェー語と違って一度も他言語の支配を受けず、人々の唯一の母語であり続けた。それには、遠隔地という地理的要因のほかに、中世文学の遺産を精神的支えとして、話者が言語擁護の努力を傾け続けたという事実も無視できない。

アイスランドでは、14 世紀半ばまでに 4 編の文法論文が編まれている。なかでも、1150 年頃の『第 1 文法論文』(ア *Fyrsta málfræðiritgerðin*) は、匿

名の著者によるゲルマン語最古の言語学的考察で、優れた音韻記述である。1540 年には、オッドゥル・ゴホトスカウルクソン (Oddur Gottskálksson 1515 頃～56) による新約聖書訳が初のアイスランド語の印刷本として、デンマークのロスキレ (デ Roskilde) で刊行された。これを境に、「中期アイスランド語」(ア *miðíslenska* 1350～1540) と「新期アイスランド語」(ア *nýíslenska* 1540～) に区分される。最初の聖書の全訳は、主教グヴズブランドゥル・ソルラウフソン (Guðbrandur Þorláksson 1541/2～1627) による 1584 年の『グヴズブランドゥル聖書』(ア *Guðbrandsbiblía*) である。同書は、南西部のスカウルホルト (ア *Skálholt* 1056～1785) と並んで、学問の拠点だった北部のハウラル (ア *Hólar* 1106～1801) の司教座に設けられたアイスランドで最初の印刷所から刊行された。外国語の要素を除去する言語純粋主義の姿勢が顕著に見られる。

豊かな中世文学と「ヨーロッパ言語の奇跡」と^な称えられる古風な特徴を備えたアイスランド語は、17 世紀のデンマーク人文主義者以来、海外の関心を集め続けた。最古のアイスランド語辞書であるマグヌス・オウラフソン (Magnús Ólafsson 1573 頃～1636) の『ルーン文字語彙資料集』(ラ *Specimen lexicí runici* 1650) から、1691 年までの 3 種類の辞書は、ラテン語で書かれ、デンマーク人とスウェーデン人の手で刊行された。最古の文法書は、スコーネの学校長を務めたアイスランド人リューノウルヴル・ヨウンソン (Runólfur Jónsson 1620 頃～54) による『アイスランド語文法の基礎』(ラ *Grammaticae Islandicae rudimenta*) である。上記のマグヌスの没後、その辞書の刊行に尽力したデンマーク人学者ヴォーム (Ole Worm 1588～1654) のはからいで、1651 年にコペンハーゲンで刊行された。類書の出現は、1668 年のポントピダンによる『デンマーク語文法』(Erik Pontoppidan: *Grammatica Danica*)、1696 年のヒエルマンによる『スウェーデン語文法』(Nils Tiällman(n): *Grammatica Suecana äller Enn Svensk Språck ock Skriftkonst*)、ノルウェーではずっと遅れて、前述のオーセンによる 1864 年の『ノルウェー語文法』(Ivar Aasen: *Det norske Folkesprogs Grammatik*) に始まる。北ゲルマン語で最初の文法書がアイスランド語について書かれたのは、

偶然ではない。リューノウルヴルは海外の要請に応えることを意図して、従来の辞書と同じくラテン語を用いたのであり、同書はオクスフォードとロンドンで再版されている。

古語の文法の最初の著者は、「ゲルマン語子音推移」で言及したように、印欧語歴史比較言語学の創始者のひとりに数えられるデンマーク人のラスクである。1811年刊行の『アイスランド語あるいは古ノルド語への手引き』(*Vejledning til det Islandske eller gamle Nordiske Sprog*)は、ラテン語以外で書かれた外国人による最初の文法書である。現在の常識とは異なって、古アイスランド語を北ゲルマン語の祖語と確信していたラスクは、豊かな古語の文学に接するために、アイスランド語の重要性をデンマーク人の同胞たちに説いた。ラスクが最も重視したのは、語形成である。言語は、変化語尾を失っても、不変化詞や前置詞などで補えるが、新しい語を創造する力を失ってしまえば、他言語から盲目的に語彙を受け入れざるを得ず、衰退を余儀なくされるという進歩的な見解をラスクは持っていた。これは屈折語尾の保持を尊び、その摩滅を言語の墮落とみなす当時の片寄った進化論的通説とは、一線を画する卓見である。このラスクの考え方は、「新造語」(neologism)を中心とする言語純粹主義運動の牽引力となり、孫弟子のアイスランド人コンラウズ・ギスラソン(Konráð Gíslason 1809~91)の尽力を筆頭に、後世に受け継がれていった。

ラスクの関心は、デスクワークにとどまらなかった。1813~15年に、現代アイスランド語の習得のために滞在した新興のレイキャヴィークで目にしたのは、デンマーク語の氾濫だった。アイスランド語の将来に危機感を抱いたラスクは、アイスランド語の能力を母語のレベルにまで高め、島内を回って人々に母語への誇りを訴えた。そして、コペンハーゲンで「アイスランド文学会」(ア *Hið íslenska bókmenntafélag* 1816~)を設立して、初代会長に就任し、北欧最古の学術雑誌『スキルトニル』(ア *Skírnir* 1827~、「洗礼」の意味)を創刊して、今日の学問の基礎を築いたのである。比較的短い生涯の間に、最初のフェーロー語文法とフリジア語文法を含む膨大な業績を残したラスクの学問的足跡は、ゲルマン語の研究と擁護の両面で比類なく広く深

いものだった。

その後、アイスランドは「独立運動の父」と称えられるヨウン・シーグルソン (Jón Sigurðsson 1811~79) を中心に、粘り強い独立運動を展開し、建国千年祭を祝った 1874 年に憲法を得て、デンマーク支配は実質的に終わりを告げた。1911 年には、「アイスランド大学」(A Háskóli Íslands) が創立された。1918 年には、デンマークと同君連合を結成して主権国家となり、第二次大戦下の 1944 年についに完全独立を達成した。

日本の約 4 分の 1 強の面積で、北極圏をかすめるアイスランド共和国では、1930 年以前には、話者は 10 万人以下にすぎなかった。2011 年の統計では、話者数は約 32 万人に達しており、先進諸國中、例外的に人口が増加している。国内には古来、他言語が存在せず、均質的な伝統社会が変容の兆しを見せながらも、ヨーロッパ諸国で唯一、多言語使用の問題とは無縁であるといえる。海岸沿いに離散して農場を構えた伝統的な居住形態も影響して、アイスランド語には、地域の特徴はあっても、明確な「地域方言」(regional dialect) は認められず、社会的階層に応じた「社会方言」(social dialect, sociolect) も希薄である。

アイスランド語は一連の音韻変化を経て、16 世紀半ばまでには現代語の音韻の骨格が定まった。とくに形態と語彙は、約千年前の古西ノルド語の姿を広範に伝えている。アイスランド語はフェーロー語よりも形態的に古風で、古来の語彙を豊富に有し、きわめて保守的である。最も使用頻度が高い 550 語中、500 語が古西ノルド語と共通し、16 世紀半ばの宗教改革以後に加わったのは、10 語にすぎないといわれている。外来語の直輸入を避け、自国語に置き換える新造語は、1964 年設立の「アイスランド言語委員会」(A Íslensk málnefnd) の主要任務となっている。heimspeki「哲学」(heim← heimur「世界」+speki「知恵」)、stjórnmál「政治」(stjórn「統治」+mál「事柄」)、lýðveldi「民主主義」(lýð← lýður「人々」+veldi「力」) など、明治期に私たちの先達が傾けたのと同じ努力が現在も連綿と続けられている。アイスランド人は世界一読書量の多い国民として知られ、1955 年にノーベル文学賞を受賞したハルドウル・ラハスネス (Halldór Laxness 1902~1998) を筆頭に、何百人も

の作家を輩出している⁴。

2.5. ノーン語 — わずかな記録を残して消滅した古ノルド語の後裔

ノルウェー人ヴァイキングが800年頃にイギリス北部にもたらした古ノルド語は、当地の支配的言語となった。北端のケイスネス (Caithness) などスコットランド沿岸部と西側のヘブリディーズ諸島では、15世紀までに消滅した。一方、北側のオークニー諸島とさらに北側のシェトランド諸島では、1195年以降のノルウェーの支配時代にも生き残った。この言語を「ノーン語」(Norn) といい、フェーロー語に最も近い。Norn は「(西) ノルド語, ノルウェー語」を意味する古ノルド語の *norœna* の縮約形で、1485年に最初の使用例がある。しかし、1379年にオークニー諸島、1469年にシェトランド諸島がスコットランドの手に渡った後は、17世紀までに住民の大半が英語低地スコットランド方言 (Low Scots) との2言語使用者になった。18世紀に教区学校がスコットランド英語で教育を始めると、ノーン語は衰退し、オークニー諸島で滅びた。そして、推定で1880年代初めに、シェトランド諸島西端のフーラ島 (Foula < 古ノ Fuglaey, 「鳥の (fugla-) 島 (-ey)」の意味) で最後の話者を失った⁵。

当地の記述は、1200年頃の『オークニー人のサガ』(古ノ *Orkneyinga saga*) や旅行記中の言及にとどまり、言語資料も少数のルーン文字銘文などに限られ、実体が不明だった。1774年、スコットランド人神学徒ジョージ・ロウ (George Low) はシェトランド諸島の総合調査を命じられて同地に渡り、この言語に興味を抱いた。そして、フーラ島で使用実体を記録し、30余りの語彙、新約聖書『マタイによる福音書』所収の「主の祈り」、35詩節からなるバラードを採集した。その成果は1879年に刊行されたが、言語資料は1805年に別人の著書に収録された。「主の祈り」には、ウォーレス (James Wallace)

⁴ アイスランド語擁護の歴史と中世以降の文学史については、清水 (2009) 参照。

⁵ Rendboe (1987: 6) 参照。従来、最後の話者は1850年に死去したとされることが多かった。

による 1700 年に著書に収められたオークニー諸島のノーン語によるヴァージョンもある。

その後、フェーロー人の言語学者イエアコブセン (Jakob Jakobsen 1864～1918) は、1893～95 年にノーン語の残照を求めてシェトランド諸島を訪れ、1 万語余りの語彙を採集した。1897 年の博士論文『シェトランド諸島のノーン語』(デ *Det norrøne sprog på Shetland*) は、英語スコットランド方言が当地の村々に浸透していく様子を描写したもので、海外でも名声を博し、フェーロー人のナショナリズム覚醒にも影響を与えた。死後に最終巻が刊行された『シェトランド諸島のノーン語語源辞典』(デ *Etymologisk Ordbog over det Norrøne Sprog på Shetland* 1908-21) は、概説とテキスト集に加えて、発音記号と語源解説を含む精緻な学問的語彙記述であり、この言語の面影を伝える貴重な資料となっている。同書には、著者の死後、友人の手による上記の博士論文の一部の英訳を含む英語版(1928-32, 1985 復刻, 参考文献参照)がある。

2.6. フェーロー語 ― 最後の機会をとらえて飛翔を遂げた言語

アイスランドとスコットランドのほぼ中間に浮かぶデンマーク領フェーロー諸島は、南南東から北北西に伸びる総計約 1,400 km² の細長い 18 のおもな島からなる。火山の噴火による青灰色の玄武岩に覆われ、460 メートルにも達する絶壁に囲まれた海岸部と 882 メートルを最高部とする山がちの地形で、雨量が多い。アイスランドと同様に森林に乏しく、緑草と湿地帯植物が茂る土地の中で耕作可能な面積は 7 % 程度にすぎないが、切り立った海岸部は海鳥の繁殖に適し、周囲の海は漁場に恵まれ、高緯度ながら比較的温暖である。

「フェーロー語」(フェ *føroyskt* [フ㊦ーリスト 'fø:ɹɪsd̥]) は 17 の島で約 48,000 人に用いられ、デンマーク本国など海外にも話者が多い。島内の話者はデンマーク語との 2 言語使用者で、学校教育でも 2 言語使用教育が目指されている。中心都市は北部最大の島、ストレイモイ島 (ストレイミ島, フェ *Streymoy*) 南部のトウシュハウン (フェ *Tórshavn*, 「(北欧神話の神) ソウ

ル (古ノ Þórr>Tór) の (-s) 港 (havn)」の意味) だが、100 余りの「ビグド」(フェ bygd) と呼ばれる村ごとに方言差が著しい。これはアイスランドとは対照的に、狭い土地ごとに密接な生活共同体を発達させたことによる。トウシュハウンの方言を標準語とみなす傾向は強いが、各地の方言も尊重されている。フェーロー語には、ノルウェー語ニューノシュクと同様に、標準発音はない。この点はアイスランド語でも同様だが、事情が異なる。アイスランド語は、広い土地に一軒家の農場を構え、集落を形成しなかったアイスランドの伝統的な居住形態の影響もあって、方言差が少なく、意思疎通に支障がないために、標準発音を定める必要がないのである。

「フェーロー諸島」の原語 Føroyar[フ㊤リヤル 'fø.ɾjaɪ] (古ノ Færejar) は、「羊の (for-<古ノ fær)+島々 (-oyar<古ノ eyjar)」の意味とされている。これは、800 年頃にこの地に到達した西ノルウェー出身のヴァイキングが目撃した羊の群れにちなむ名称で、600 年頃には居住していたと推定されるケルト系アイルランド人の隠者が持ち込んだものらしい。アイスランドと同じ 999 年頃にキリスト教を受け入れ、1100 年頃にトウシュハウンの南のチルチュベール(フェ Kirkjubour)に司教座が置かれた。古来、行政の中心は、トウシュハウン近郊のティンガネース (フェ Tinganes) で毎年 7 月 29 日に開かれた国民議会レグティング (フェ Løgting) であり、アイスランドのアルシングに相当する。植民の様子とキリスト教伝道の経緯については、13 世紀初頭に記された『フェーロー人のサガ』(古ノ *Færeyinga saga*) に語られている。

1780 年代以前は文献が乏しく、1000 年頃と 1200 年頃のルーン銘文 2 点、1298 年の上質皮紙 4 枚からなる農業条例『羊文書』(フェ *Seyðabrævið*) と後代の改訂版などにとどまる。古来、ノルウェーの属国だったが、1380 年にデンマークに帰属してからは、デンマーク語の影響が強まった。1540 年以降は、宗教改革後に教会の使用言語がラテン語からデンマーク語に代わり、デンマーク人中心の行政組織ができるなどして、デンマーク語が当地の唯一の書き言葉となった。宗教改革期に書き言葉を発達させられなかったことが、フェーロー語の歩みを妨げる大きな原因になったといえる。17 世紀には、外

国船の襲来や 1660 年以降のデンマーク絶対主義王政による搾取に苦しんだ。それでも、デンマークの対外政治の弱体化とともに、1852 年にはレグティングが復活した。1856 年には、3 世紀以上にわたって続いた通商独占権が廃止されて、経済状況が好転したが、これは皮肉にもデンマーク語の使用機会を高める結果となった。1300 年以前は約 1,000 人だったと推定される人口は、1800 年には約 5,000 人、1900 年には約 15,000 人に達したが、19 世紀後半のトウシュハウンではデンマーク語が街頭にあふれ、周囲の村々にも浸透する勢いを見せていた。

1770～80 年代になって、フェーロー人のスヴェアボ(Jens Christian Svabo 1746～1824)は当時の発音に従った初の正書法を考案した。そして、バラードを中心に 52 編の民謡を収集し、『フェーロー語・デンマーク語・ラテン語辞典 I-II』(*Dictionarium Færoense: Færøsk-dansk-latinsk ordbog I-II*)を編み(1966～70 刊行)、フェーロー語を近代的な書き言葉のレベルに高める試みを行った。日本では未紹介の「フェーローバラード」(フェ kvæði)は 200～300 詩節にも及ぶ中世以来の韻文叙事詩であり、歌と輪舞を伴って演じられる。200 編以上の作品が知られており、北ゲルマン語圏では類例を見ない。ただし、スヴェアボの姿勢は客観的な理性主義に立脚するもので、デンマーク語の優位性を認め、フェーロー語の凋落を予期して、在りし日の姿を後世に伝えることを念頭に置いていた。

ところが、1811 年にデンマーク人のラスク(2.4.参照)が初のフェーロー語歴史文法を『アイスランド語あるいは古ノルド語への手引き』の巻末に添え、同じくデンマーク人の牧師レングビュー(Hans Christian Lyngbye 1782～1837)が 1822 年にスヴェアボの正書法を用いて、初のフェーロー語による単行本となったバラード集を刊行すると、ロマン主義によるナショナリズムの中で言語擁護の試みが開始された。コペンハーゲンでアイスランド独立運動の父ヨウン・シーグルソン(2.4.参照)と親交を深めた神学徒ハンメシュハイム(Venceslaus Ulricus Hammershaimb 1819～1909)は、1845 年の勅令に、デンマーク語がフェーロー人の母語であると銘記されたことにたいして、強い憤りを覚えた。そして、方言調査に基づいて、学校教育への導入を

見越した上で、独自の正書法を考案し、1846 年刊行の民謡集で実践し、1854 年に『フェーロー語文法』(デ *Færoisk Sproglære*) で体系化した。ただし、その正書法は、古ノルド語にさかのぼる語源重視の原則で貫かれ、習得を困難にするおそれがあった。ハンメシュハイムはそれを承知の上で、相違が激しい諸方言間の平等と相互理解を保ち、スカンジナビアの人々に理解されるように配慮し、古ノルド語との絆を尊重したのである。その正書法は反対論を抑えて支持され、現在に至っている。

1874 年にアイスランドが広範な自治権を獲得すると、コペンハーゲン大学のフェーロー人学生たちが叙情詩を中心に文学活動を開始し、母語の擁護と自治拡大を求める動きにつながった。1889 年には、前年のトゥシュハウンでの集会を受けて、「フェーロー人国民協会」(フェ *Føringafelag*) が設立された。この出来事は、フェーロー人国民主義運動の幕開けとされている。同協会は 1890～1906 年の間にフェーロー語だけによる月刊誌を発行して、正書法を広め、専門用語の充実、国民高等学校の創立などにおいても、重要な役割を果たした。ハンメシュハイムは、前述のノーン語研究とフェーロー民間伝承の編集で名高いイエアコブセンと協力して、1891 年に記念碑的な『フェーロー語文典 I-II』(デ *Færoisk Anthologi I-II*) を刊行した(1991 年復刻)。第 1 巻は、1854 年の文法書の改訂版、それにバラードと散文テキストを含んでいる。第 2 巻は、イエアコブセンによるデンマーク語とのすぐれた対訳辞書である。

20 世紀に入ると、フェーロー語は公的使用の機会を増し、1938 年には行政、教育、教会での使用を含めて、デンマーク語と対等の地位を獲得した。1948 年には、フェーロー諸島が広汎な自治権を得ると、その第 1 言語として認可された。聖書の翻訳は、新約聖書訳が 1937 年、全訳が 1949 年に完成している。1952 年には「フェーロー・アカデミー」(フェ *Føroya Fróðskaparfelag*)、1965 年には大学に相当する学術機関である「フェーロー大学」(フェ *Fróðskaparsetur Føroya*) が設立された。

現在のフェーロー語は、書き言葉では独自の特徴を示すが、話し言葉にはデンマーク語的要素が色濃く混入している。辞書にはフェーロー語的な語彙

が収録されていても、日常生活で一般に話者の口にのぼるのは、むしろデンマーク語的な語彙である場合が少なくない。1985 年設立の「フェーロー言語委員会」(フェ Føroyska málnevndin) は、アイスランド語に準じて新造語と規範確立に尽力している。フェーロー語擁護運動は、前述のノーン語の命運を意識しつつ、アイスランド語を模範として、ロマン主義思潮の中で最後の波をとらえて飛翔を遂げた例といえよう。

3. ドイツ語とヨーロッパの仲間たち — 西ゲルマン語とその特徴 (1)

3.1. 「高地ドイツ語子音推移」とドイツ語方言 — 南北の区分と「ライン扇状地」

西ゲルマン語は規模が大きく、ヨーロッパ以外にも広がっている。まず、ドイツ語を取り上げよう。ドイツ語はヨーロッパ連合 (EU) の中で最大の話者をかかえ、ドイツ (ド Deutschland)、オーストリア (ド Österreich)、スイス (ド Schweiz) の主要 3 国のほかに、ルクセンブルク (ド Luxemburg)、リヒテンシュタイン (ド Liechtenstein)、イタリア北部南チロル (ド Südtirol)、ベルギー東部 (ド Ostbelgien) に及んでいる。第 2 言語話者を含めると、話者数は 9,500 万人余りに達し、東欧や南北アメリカ大陸を加えると、1 億人を越えるともいわれている。ただし、上記の 7 カ国に限っても、その実体は均質性からは程遠く、地域の特徴は色彩に富み、複数の中心地ごとに変異性を帯びた「標準変種」がある。以下では、その方言区分を中心に解説していこう。

方言地図は、時間軸に沿って音楽のように展開する言語の発達を、絵画のように平面上に映し出してくれる。標準ドイツ語は、中部・南部の高地ドイツ語、とくに中東部の方言の特徴を反映している。なかでも、南から北に及んだ「高地ドイツ語子音推移」、とりわけ無声閉鎖音 p, t, k の推移は、ドイツ語圏を段々畑のように細分化し、社会的背景も反映する重要な尺度である。k > ch の変化の北端を示す「等語線」(isogloss) の北側に位置し、「高地ドイツ語子音推移」をまったく受けていない地域の方が低地ドイツ語である。「ベンラート線」(ド Benrather Linie, make**n**[k]/ma**ch**e[n], 英 make),

あるいは厳密には、さらに北西を走る「ユーアディンゲン線」(ユルディンゲン線, ド Ürdinger Linie, ik [k]/ich [ç], 英 I) がその等語線とされている。その南側から, p>pf の変化(**appel/apfel**, 英 apple) の北端を示す「ゲルマースハイム線」(ド Germersheimer Linie, または Speyrer Linie「シュパイアー線」)までが中部ドイツ語, その南側が上部ドイツ語であり, あわせて高地ドイツ語という。ただし, 語内部のどの位置でも完全に子音推移を起こしているのは, 最南部の「ボーデン湖・ズントガウ線」(ド Bodensee-Sundgau Linie) 以南の地域に限られている。

この3者は複数の方言の集合であり, 単独の統一体ではない。たとえば, 低地ドイツ語を学ぶ場合には, まずどれかひとつの下位方言を学習することになる。しかし, どの方言にも教材がそろっているわけではないので, 学びやすい方言は限られている。以下の説明では, 私たちに学びやすい代表的な方言はどれか, 簡単に言い添えることにしよう。

「高地ドイツ語子音推移」の北限を示す等語線は, ライン川周辺の「西中部ドイツ語」(ド Westmitteldeutsch)で扇の形に細かく分岐している。これを「ライン扇状地」(ド Rheinischer Fächer)という。当地は古くからフランク王国のお膝元で, その後も政治文化の中心地として方言区分が進行した。かつての選挙候国や大司教管区の境界とも一致しており, 社会制度の影響も無視できない。一般に等語線は, 古い歴史を刻んだ地域で込み合っていることが多い。ドイツ語圏では, 西部地域に比べて東部地域では, 等語線の間隔が広く, 方言分岐があまり進んでいない。これは, 東部地域が比較的新しい時代にドイツ語圏に移行したことと関係がある。

「ライン扇状地」に「東中部ドイツ語」(ド Ostmitteldeutsch), アルザス地方からスイスにかけての上部ドイツ語アレマン方言を加えて, 「高地ドイツ語子音推移」の有無から見た方言分布をまとめてみよう⁶。

⁶ 拙稿「ゲルマン語の歴史と構造 (4)——古ゲルマン諸語 (2)——」所収の地図 11, 12 (94, 95 ページ) 参照。

低地ドイツ語 (子音推移なし)

英 *I make thorp* 「村」 *that apple pound child*
 ik maken dorp dat appel pund kind

中部ドイツ語

西中部ドイツ語：

リプアーリ方言 (ド Ripuarisch, クレーフェルト (ド Krefeld) 周辺の北部の飛び火地域), ユーアディンゲン線 *ik > ich*)

ich maken dorp dat appel pund kind

リプアーリ方言 (ケルン (ド Köln) 周辺, ベンラート線 *ma~~k~~en > ma~~k~~hen*)

ich ma~~k~~hen dorp dat appel pund kind

モーゼルフランケン方言 (ド Moselfränkisch)：ルクセンブルク語, アイフェル境界 (ド Eifelbarriere) *dor~~p~~ > dor~~f~~*)

ich ma~~k~~hen dor~~f~~ dat appel pund kind

ラインフランケン方言 (ド Rheinfränkisch), フンスリュク境界 (ド Hunsrückbarriere) *da~~t~~ > da~~s~~*

ich ma~~k~~hen dor~~f~~ da~~s~~ appel pund kind

東中部ドイツ語：語頭の *p > (pf >) f* の変化が特徴的

ich ma~~k~~hen dor~~f~~ da~~s~~ appel f~~u~~nd kind

上部ドイツ語：

低地アレマン方言 (ド Niederalemmanisch)：アルザス方言, 東フランケン方言, 北部のスイスドイツ語, バイエレン・オーストリア方言；ゲルマースハイム線 (シュパイアー線) *ap~~p~~el > ap~~f~~el*

ich ma~~k~~hen dor~~f~~ da~~s~~ ap~~f~~el p~~f~~und kind

高地アレマン方言(ド Hochalemanisch)：南部のスイスドイツ語，ボーデン湖・ズントガウ線 *kind* > *chind* /kh/ (= *kchind*)

ich *machen* *dorf* *das* *apfel* *pfund* *chind*

3.2. 低地ドイツ語と東西方言区分——「東方植民」の遺産

東西を2分する縦の等語線もある。上記のように，中部ドイツ語は語頭の p > (pf >) f の変化の有無 (*pund* / *fund*) によって，西中部ドイツ語と東中部ドイツ語に区分される。上部ドイツ語では，本来の複数形に由来する *euch* 「君たちを」(複数対格) に準じた語形を用いる西側のアレマン方言および東フランケン方言にたいして，双数形に由来する *enk* 「君たちを」(複数対格) に準じた語形を保つ東側のバイエルン・オーストリア方言(ド Bairisch-Österreichisch) が別のグループにまとめられる。さらに，低地ドイツ語はリューベク以東のエルベ川沿岸付近を境として，次の相違を示す。

① 西低地ドイツ語 (ド Westniederdeutsch)

北低地ザクセン方言 (ド Nordniedersächsisch)

ヴェストファーレン方言 (ド Westfälisch)

オストファーレン方言 (ド Ostfälisch)

低地ライン方言 (ド Niederrheinisch)⁷

② 東低地ドイツ語 (ド Ostniederdeutsch)

メクレンブルク・フォアポマーン方言 (ド Mecklenburgisch-Vorpommersch)

マルク・ブランデンプルク方言 (ド Märkisch-Brandenburgisch)

中部ポマーン方言 (ド Mittelpommersch)

⁷ 低地ライン方言だけはフランケン方言を基盤とし，標準オランダ語を構成する低地フランケン方言に連なっている。その他の低地ドイツ語の方言は，古ザクセン語とその拡大に由来する。

北低地ザクセン方言はクラウス・グロート (Klaus Groth 1819~99), メクレンブルク・フォアポマーン方言はフリッツ・ロイター (Fritz Reuter 1810~74) という, 19 世紀ロマン主義時代の低地ドイツ語復興運動を代表する 2 大作家の出身方言である。ともに学習教材が豊富で, 学びやすい。ただし, 東および西低地ドイツ語ともに標準語はなく, 上記の 7 方言にも下位方言がある。なかでも, 北低地ザクセン方言北東部の「東フリースラント方言」(ド Ostfriesisch) はフリジア語, 北端の「シュレースヴィヒ方言」(ド Schleswigsch) はデンマーク語を「基層言語」(substratum) としており, 随所で特異な性格を示す。たとえば, 後述する動詞の現在形複数の語尾は, -t ではなく, 例外的に -en となる。なお, 低地ドイツ語東フリースラント方言を「東フリジア語」とする誤記が多いが, この地にはフリジア語は残っていない(6.1. 参照)。低地ドイツ語全体の正確な話者数の査定は困難だが, およそ 1 千万人を数えるともいわれている (Elmentaler 2009: 31)。

ドイツ語圏では, 東西の区分は南北の区分よりも新しい。西低地ドイツ語は大部分が古ザクセン語に由来するが, 東低地ドイツ語は 10 世紀以降のドイツ人による「東方植民」(ド Ostkolonisation) によって誕生した。「東方植民」は 12~13 世紀に規模を拡大し, エルベ川とその支流のザーレ川 (ド Saale) 以東, くわしくいうと, ベルリンを含む旧東ドイツ, パルト海沿岸部, 内陸のシュレージエン (ド Schlesien), ボヘミア (Bohemia) に及んだ。オーストリアの大部分も, 遅くともこの時代までにスラブ語を駆逐して, ドイツ語圏となった。Lübeck 「リューベク」, Rostock 「ロストク」, Berlin 「ベルリン」, Leipzig 「ライプツィヒ」, Dresden 「ドレースデン」, Graz 「グラーツ」などの都市名は, どれもスラブ語起源である。メクレンブルク地方の東側からポーランドに広がる地方名 *Pommern* 「ポマーン」, 哲学者カント (Immanuel Kant 1724~1804) が生活し, 現在はロシア領の *Ostpreußen* 「東プロイセン」に含まれる *Preußen* 「プロイセン」の地名は, p-で始まっている。これは「ゲルマン語子音推移」で述べたように, 古典的解釈では, 印欧祖語で再建不可能な語頭の b-に由来し, ゲルマン語ではあり得ない。文化的にも, 南北の方言区分は, スイスを除く南部高地地方のカトリックと北部低地地方

のプロテスタントというおおまかな相違にも反映している。第二次大戦後、ドイツは東西に分断されたが、スターリンの介入以前、イギリスの首相チャーチルは南北に分ける腹案を持っていたといわれている。

東・西低地ドイツ語を分ける目印に、動詞の現在形複数の語尾がある。西低地ドイツ語では -et (>-(e)t)，東低地ドイツ語では -en (>-e(n)) に統一された。これは「北海ゲルマン語的特徴」に由来する。西低地ドイツ語北低地ザクセン方言と東低地ドイツ語メクレンブルク・フォアポマーン方言の語形を対比させてみよう⁸。

- ド {wir mach**en**/ihr mach**t**/sie mach**en**} 「{私たちは/君たちは/彼(女)らは} 作る」(現在形) ← machen 「作る」(不定詞)
 ザ {wi/ji/se} maak**t** ← maken
 ⇔ メ {wi/ji/sei} måk**en** ← måken

標準ドイツ語の -en/-t/-en (<古高ド -um(ēs)/-et/-ant) にたいして、古ザクセン語の古来の語形は *-am/*-ið, *-id/*-anþ だったと推定されている(p=th[θ])。北海ゲルマン語の形成とともに、摩擦音の直前の n が消失して、3人称が *-anþ > 古ザ -ad (古英 -ap) となり、同じく -ð で終わる 2人称との類推から、-m (>-n) で終わる 1人称が駆逐され、-ad (>-(e)t) に統一された。西低地ドイツ語の語尾 -(e)t は、これを受け継いでいる。一方、東低地ドイツ語の -en (>-e(n)) は、後の時代の発達である。-et > -en の変化については、ハンザ同盟の盟主リューベクの書き言葉が 1350 年頃に、接続法と過去現在動詞の語尾 -en との類推やオランダ語の影響で -en に移行し、1400 年頃までに広く普及したことによるとする説がある。オランダ語では、摩擦音の直前の n は脱落せず、ドイツ語と同じく、3人称の -ant の -t にあたる子音が

⁸ 西低地ドイツ語北低地ザクセン言は Thies (2010: 120)，東低地ドイツ語メクレンブルク・フォアポマーン方言は Hermann-Winter (2006: 46) に従って示す。両方言ともに [a:] > [ɔ:] と変化したので、a/aa/ā は [(広い)オー ɔ:] を表す。

脱落し (-ant>-en), 1 人称 (-um(ēs)>-en) との類推で 2 人称の -et が駆逐されて, 統一複数語尾 -en になった。東低地ドイツ語には, 移住前の各地の方言による混成言語の性格があり, 中心地の書き言葉が与えた影響は否定できない。

3.3. ルクセンブルク語と中部ドイツ語 — 多言語主義政策の手本

「ルクセンブルク語」(ル Lëtzebuergesch) は, 西中部ドイツ語を下位区分する「ライン扇状地」の西端に位置し, 「西モーゼルフランケン方言」(ド Westmoselfränkisch) を母体としている。1984 年の言語法によって, フランス語, ドイツ語と並ぶルクセンブルク大公国 (ル Groussherzogtum Lëtzebuerg) の公用語に昇格した。1985 年の「シェンゲン (ル Schengen) 協定」で近隣国と入国審査なしの往来を認め, 欧州連合 (EU) の基礎を築いた同国では, 人口約 50 万人の 4 割強, 首都圏では約 6 割をおもにロマンス語圏からの移民が占めている。ルクセンブルク語の話者数は, おおまかに約 30~40 万人と見積もられている。多額の財政投資を要する公用語化は, 世界有数の豊かな経済水準を背景に, 政府の支援を受けて推進されており, 国民のアイデンティティを支えている。同じく多言語国家を標榜するスイスやベルギーでは, 地域ごとに言語別の住み分けがなされているが, ルクセンブルクは国民全員に 3 言語教育を施すことを信条としている。この点で, 統合ヨーロッパの多言語主義政策の手本といえよう。

9~10 世紀の断片的資料を別にすれば, 最古のまとまった文献として有名な作品は, 1999 年に写本が発見されたドミニコ会修道士ヘルマン・フォン・フェルデンツ (ド Hermann von Veldenz, ル Hermann vu Veldenz) による聖者伝『フィアンデンのヨランダ』(ド Yolanda von Vianden, ル Yolanda vu Veianen, 1293 年頃, 5,963 行) である。以後, 19 世紀ロマン主義による文学隆盛期を経て, 連綿と受け継がれてきた。ルクセンブルク語は 20 世紀末に突然, 生まれたわけではない。その土壌は, はるか以前の時代から造成されていたのであり, 世間の耳目を集める契機が欠けていたにすぎない。

政治的には、神聖ローマ皇帝カール 4 世 (Karl IV. 1316~78) に代表される 14~15 世紀半ばのルクセンブルク家の繁栄後は、大国の属領に組み込まれる時代が続き、フランスに南部(ピレネー条約 1659)、ドイツに東部(ウィーン会議 1815)、ベルギーに西部(ロンドン条約 1839)の領土(現在のベルギー、リュクサンブール州(フラ Luxembourg))を割譲された。これは現在の国土 2,586 km² よりも、はるかに広い面積に及んでいる。ただし、逆説的にいえば、結果的にはルクセンブルク語地域が残り、公用語化が容易になったともいえる。

ドイツ語には、本国から遠く離れ、異質な言語に囲まれて孤立した「言語の島」(ド Sprachinsel) が東欧を中心として、多数残っている。ルーマニアのジーベンビュルゲン地方(ド Siebenbürgen, 英 Transylvania 「トランシルヴァニア」)のドイツ語方言もその一例であり、ルクセンブルク語との類似性が認められる。これには、12 世紀半ばから 13 世紀末にかけて、モーゼル川(ド Mosel) 沿岸地域から行われたトランシルヴァニア植民との関係が指摘されている。

3.4. スイスドイツ語と上部ドイツ語 — ダイグロシアと標準変種

上部ドイツ語は南西部の「アレマン方言」(ド Alemannisch)、北部の「東フランケン方言」(ド Ostfränkisch)、南東部の「バイエルン・オーストリア方言」(ド Bairisch-Österreichisch) に大別される。「スイスドイツ語」(ス Schwyzerdütsch, ベルン方言の語形) はアレマン方言南部を覆う諸方言の集合で、統一的な標準語は存在しない。上述のように、語頭の k > (k)ch /kx/ (例. *Chind* (= *Kehind*) 「子供」 ↔ ド *Kind*) の変化を経た「高地アレマン方言」(ド Hochalemannisch) に属している。スイスドイツ語からははずれるが、北に隣接するアルザス方言は、標準ドイツ語と同じく、その変化を免れた *Kind* 「子供」という語形を示す「低地アレマン方言」(ド Niederalemannisch) の一員である。ただし、アルザス方言の最北部は中部ドイツ語ラインフランケン方言(ド Rheinfränkisch)、最南部は高地アレマン方言をかすめている。

スイスドイツ語は、多言語国家スイスの広い地域で用いられている⁹。その主要方言には、西部の「チューリヒ(=ツューリヒ)方言」(チュ Züritüütsch)、南東部の「ベルン方言」(ベ Bärndütsch)、北東部のバーゼル方言(バ Baaseldytsch)がある。チューリヒ方言とベルン方言が教材が充実していて、学びやすい。「ドイツ語」を意味する原語の -tüütsch/-dütsch/-dytsch から、相互の差異はうかがえるだろう。次に一例を挙げて、標準ドイツ語と比べてみよう。

- ド {wir dank**en**/ihr dank**t**/sie dank**en**} 「{私たちは/君たちは/彼(女)らは} 感謝する」(現在形)← danken 「感謝する」(不定詞)
- アル {mér/éhr/sé} danke**e** ← danke
- バ {mer/er/si} dangge**e** ← dangge
- チュ {mir/ir/si} tank**ed** ← tanke
- ベ {mir danke/dihr dank**et**/si danke**e**} ← danke

チューリヒ方言とバーゼル方言では、スイスドイツ語ではないアルザス方言と同様に、動詞の現在形が「北海ゲルマン語的特徴」と共通の「統一複数」の語尾を示している。チューリヒ方言の -ed、バーゼル方言とアルザス方言の -e という語尾は、3.2. で述べた東・西低地ドイツ語の区分を想起させる¹⁰。*mér/mer/mir*「私たち」(英 *we*, ド *wir*) の m- による語形は、バイエルン方言 (*miä*)、ルクセンブルク語 (*mir*)、ペンシルヴェニアドイツ語 (*mir*) にも見られる。これはかつての語尾 -en で終わる定動詞への接語化によって、n-w>m と変化した結果であり、西部のノルウェー語方言 (*mi*↔*vi* (<

⁹ スイスドイツ語の構造と社会的地位の詳細については、熊坂(2011) 参照。

¹⁰ König (1998¹²: 158) 参照。用例の表記は、ベルン方言は Greyerz/Bietenhard (1997⁶ (1976)), Marti (1985), チューリヒ方言は Weber (1987³), Weber/Bächtold (1983³), バーゼル方言は Suter (1992³), (1984), アルザス方言は Brunner (2001), バイエルン方言は Merkle (1990⁴) に従う。アルザス方言の é は狭母音, è は広母音, à は前舌母音, a は後舌母音を表す。

w-)とも共通している¹¹。ベルン方言の *dīhr* 「君たち」(英 *you*, ド *ihr*) の *d-* は、ルクセンブルク語の *dir* と同様に、定動詞の語尾 *-t* が異分析によって、*ihr* 「君たち」の語頭に付加されたことによる(ペ *heit-ihr* > *hei-t-ihr* > *heit dihr* > *dīhr heit*, 英 *you have*, ド *ihr habt*)。このふたつの事実は、ともに「定動詞＋人称代名詞」の語順と接語化の頻用に起因する。

方言には、ある種の劣等感がつきまとうことが多い。これは、方言の使用地域がしばしば経済的に恵まれていない事情と関係がある。低地ドイツ語は、その一例といえるだろう。一方、豊かな国力を背景とするスイスドイツ語の話者は、母語に引け目を感じておらず、積極的にスイスドイツ語を使用する。スイスドイツ語圏で、スイス人どうしが標準ドイツ語で会話することは、学校の授業などを除けば、ほとんどない。20 世紀の 2 度の大戦を通じて、標準ドイツ語にたいする「精神的国土防衛」(ド *geistige Landesverteidigung*) の意識が高まり、スイスドイツ語の使用に拍車がかかった。

ただし、活力あふれるスイスドイツ語諸方言に統一的な言語規範の確立を求め、正規の「言語」の地位に高めようとする動きは、現時点では認められない。北ドイツのおもな書店には、たいてい低地ドイツ語の書籍の数々が書棚に並んでいる。しかし、このような光景は、スイスのドイツ語圏地域には求めがたい。日常会話を通して母語として習得されるスイスドイツ語は、同胞との話し言葉に用い、学校教育で正式に習得する標準ドイツ語は、公的な書き言葉として用いるというように、たがいに補い合っている¹²。通常の標準語と方言の関係とは違い、母語と外国語の関係とも異なって、同一言語の変種が社会的機能に応じて明確に使い分けられている場合の 2 言語使用を「バイリンガリズム」(*bilingualism*) と区別して、「ダイグロシア」(二変種使い

¹¹ Christiansen (1946-48 : 213), Skjekkeland (1997 : 269) のノルウェー語方言地図を参照。

¹² 外国人との会話では標準ドイツ語を用いるので、この場合には、標準ドイツ語も話し言葉の機能を持つことになる。また、電子メールなどの私的な通信手段にはスイスドイツ語を用いるので、この場合には、スイスドイツ語にも書き言葉としての機能があることになる。

分け, diglossia) という。ダイグロシアの定義には異論があるが, スイスドイツ語と標準ドイツ語の関係は, その一例とされることが多い。

スイスドイツ語を「言語」としての地位にあえて押し上げようとしない事情の背景には, スイスがすでに多言語国家であり, ドイツ語を中心として歴史を刻んできた経緯がある。ドイツ語が最も有力な公用語である現状において, そもそも統一体を形成しないスイスドイツ語をさらに公用語に追加すれば, さまざまな問題が生じることは容易に予測される。ここで, 同国の言語事情を簡単に紹介しておこう。

スイス連邦(ド Schweizerische Eidgenossenschaft)の正式名称は, ドイツ語から直訳すれば, 「スイス誓約同盟」となる。この「誓約同盟」(ド Eidgenossenschaft)の起源は, 1291年にハープスブルク家に対抗して, 原初三州が永久同盟を結んだことに由来する。1648年の三十年戦争の終結とともに神聖ローマ帝国から分離して, 正式に独立国となった。その間, 1513年には13の州(カントーン, ド Kanton)に増えていたが, すべてドイツ語圏だった。その他の言語圏が加わったのは19世紀初頭であり, 1815年のウィーン会議の結果, 永世中立国として認められて22州に達した。しかし, 1848年の憲法でフランス語とイタリア語も国語として認可されるまで, ドイツ語が主要言語であり続けた。

現在, 同国は26の州に分かれ, ドイツ語(人口約780万人の約64%)のほかに, 西部のフランス語(約20%), 南西部のイタリア語(約6.5%)およびレト・ロマンス諸語に属するロマンシュ語(約0.5%)¹³の4言語を国語とし, 地域的公用語であるロマンシュ語を含めて, 同じく4言語を公用語として認めている¹⁴。ただし, その使用は州ごとに制限され, ほとんどの州が単一言語の行政単位を形成している。スイスでは, 伝統的に国語間の平等を保つため

¹³ スイスでは国勢調査に母語の記載を行っており, 近年では, この4言語以外の言語を母語とする話者が国民の約9%を占めている。

¹⁴ 拙稿「ゲルマン語の歴史と構造(4)——古ゲルマン諸語(2)——」所収の地図13(96ページ)参照。

に、他の州の言語を取り入れる形で多言語教育に配慮がなされてきた。日常生活で自然に他の公用語に触れる機会も多い。しかし、それでも全国民が多言語使用者であるわけではない。近年では、他の州の言語よりも英語の能力が高い若者も増えている。スイスの多言語使用はルクセンブルクとは異なり、政治問題を別にすれば、後述するベルギーの状況に近いといえる。ただし、複数の言語を公用語とする州も4つある。ベルン(ド Bern)、フリブール(フラ Fribourg, ド Freiburg「フライブルク」)、ヴォー(フラ Vaud, ド Waadt「ヴァート」)はドイツ語とフランス語、グラウビュンデン(ド Graubünden)はドイツ語、ロマンシュ語、イタリア語を公用語としており、いずれもドイツ語を含んでいる。

さらに、スイスには「ドイツの標準ドイツ語」とは異なって、標準ドイツ語の「標準変種」(ド Standardvarietät)としての「スイスの標準ドイツ語」があるとされている。英語についても、イギリス、アメリカ、オーストラリアなどの間で、微妙な差があることを連想すればいいだろう。ただし、標準変種とは標準ドイツ語のヴァリエーションを指し、あくまでもスイスドイツ語諸方言とは別物である。隣国のオーストリアにも、「オーストリアの標準ドイツ語」としての標準変種がある。ドイツ語が公用語となっている7カ国では、ドイツ、スイス、オーストリアの主要3国を中心に、各自の標準変種が認められるとされている。ただし、オーストリアには、バイエルン方言(ド Bairisch)に連なる個性的なオーストリア方言(ド Österreichisch)はあるが、ダイグロシアの状況はない。3国のテレビニュースのアナウンサーの発音を聞けば、ドイツ語に標準変種がある事実には容易に気がつく。しかし、その他の相違は少数の語彙を除けば、明確とはいえない。標準ドイツ語が英語と同様に「複数中心地性」(ド Plurizentrität)を備えた言語であるという性格づけには、あいまいさがつきまとう¹⁵。

ドイツ語が高地ドイツ語を標準語の基盤としていることを知った読者は、

¹⁵ Ammon et al. (Hg.) (2004) はドイツ語の標準変種を語彙レベルで記述した組織的試みである。

上部ドイツ語に属するスイスドイツ語は低地ドイツ語よりも理解しやすいと思うかもしれない。しかし、そうとは限らない。「高地ドイツ語子音推移」の一部が標準ドイツ語に反映されていないように、上部ドイツ語南部の特徴には、標準ドイツ語の蚊帳の外に置かれているものが多い。ドイツ語圏各地の方言によるメルヒェンを収録した『グリム童話集』（ド *Kinder- und Hausmärchen*）をひも解いてみよう。ドイツ語を学習した私たちに最も理解が困難なのは、スイスドイツ語によるメルヒェンにちがいない。標準ドイツ語との距離を実感するのは、スイスドイツ語話者も同じである。19世紀写実主義文学を代表するスイスの作家ケラー（Gottfried Keller 1819～90）の教養小説『緑のハインリヒ』（ド *Der grüne Heinrich*）を例にとろう。人生の転機を求めて、主人公ハインリヒはスイスの故郷から隣国ドイツの芸術の都ミュンヘン（ド München）に向けて、画家として旅立つ。ライン川を越えたことを告げられたハインリヒは、強い胸の鼓動を感じ、「今こそ私の青春時代を養い、最もなつかしい夢を育ててきた書物に記されていた言葉を話す権利と義務が生じたのだ」（第3巻第10章）と自覚するのである。現在でも、標準ドイツ語を学校で正式に習う外国語と意識しているスイスドイツ語話者は少なくない。

3.5. ドイツ語アルザス方言 — 『最後の授業』の真実

アルザス方言（ド Elsässisch, アル Èlsässerditsch, èlsässisch）の使用地域はライン川をはさんで、独仏国境の西側に位置している。同地は、842年にドイツ語とフランス語の住み分けを定めた『ストラスブールの宣誓』（『シュトラースブルクの宣誓』ド *Straßburger Eide*）以来、ドイツ語圏組み込まれた。前述の古高ドイツ語によるオトフリートの『福音書』、中高ドイツ語によるゴトフリート・フォン・シュトラースブルク（Gottfried von Straßburg? ～1215）の未完の宮廷恋愛叙事詩『トリスタン』（ド *Tristan*）、初期新高ドイツ語によるゼバスティアン・ブランツ（Sebastian Brant 1458～1521）の風刺文学の傑作『愚者の船』（ド *Das Narrenschiff* 1494）など、この地で生まれた各時代を代表する重要な作品も少なくない。1945年にフランス領となる

まで、政治的帰属はフランスとドイツの間で揺れ動いた（独＞三十年戦争 1648 仏＞普仏戦争 1870 独＞第一次大戦 1919 仏＞第二次大戦 1940 独＞第二次大戦 1945 仏）。話者数は、推定で約 130 万人を数えるともいわれている。

ヨーロッパの多言語使用には、私たちの想像を越えた複雑な事情が潜んでいる。フランスの作家ドーデ (Alphonse Daudet 1840～97) の短編小説『最後の授業』を例に取ろう¹⁶。1870～71 年の普仏戦争で、北方の新興国プロイセン（＝ドイツ帝国）は普れ高いフランスに勝利した。作品の舞台であるアルザス地方の学校教師アメル先生は、もうすぐドイツの兵隊たちがやって来る、これからはドイツ語しか教えてはいけない、フランス語の授業は今日で最後になる、しかし、自分の言語を保っている限り、牢獄の鍵を握っているようなものだ。フランス万歳、という言葉を残して授業を終え、教室を後にする。いかにもドイツ語が悪者という印象を抱くが、作中の生徒たちはドイツ語アルザス方言を第 1 言語としていたと考えられ、「話す（読む）ことも書くこともできない」フランス語を学校で習っていたのである。アメル先生はフランス語を押しつける立場にあったわけで、言語の多様性を否認する偏見を招く作品として、今では教科書に採用されることもなくなった。ただ、アメル先生自身にも、居合わせた生徒たちの両親にも、単純な対立では割り切れない複雑な思いがあったにちがいない。

4. ヨーロッパを越えたドイツ語の仲間たち ― 西ゲルマン語とその特徴 (2)

4.1. イディッシュ語 ― 「再語彙化」から見た系統関係

近代ヨーロッパが帝国主義的植民地政策に傾いた 19 世紀から 20 世紀初頭にかけて、当時の後進国ドイツは遠く列強諸国の後塵を拝した。ドイツ語がアフリカ南部のナミビアに広がったのは、稀な例外である。ナミビアでは、英語優先策を全面に押し出す 1990 年まで、ドイツ語が公用語のひとつだった。さて、それとは別に、真摯な尽力と数奇な運命によって、遠方の地で独

¹⁶ 田中 (1981: 121-128) 参照。

自の道を歩んだ3例を紹介しよう。

まず、ゲルマン語としておそらく最も根本的な変貌を遂げた「イディッシュ語」(イ yidish)がある。ユダヤ人が用いるいわゆる「ユダヤ語」の中で最も話者が多く、スペイン・ポルトガル系ユダヤ人を指す「セファルディーム」(Sephardim)にたいして(Sepharad はヘブライ語で「スペイン」の意味)、ドイツ・東欧系ユダヤ人を指す「アシュケナジーム」(Ashkenazim)の母語である(Ashkenaz はヘブライ語でおおよそ「ドイツ」の意味)。独自の工夫を施したヘブライ文字を用いて、右から左につづる。断片的資料を除けば、まとまった文献は1382年の文学作品に始まる。宗教と学問を担ったヘブライ語にたいして、イディッシュ語は世俗文化を代弁し、豊かな文学的伝統を有している。ミュージカル『屋根の上のヴァイオリン弾き』の原本になった『牛乳屋テヴィエ』(イ *Tevye der Milkhiger* 1878)の作者ショレム・アレイヘム(Sholem Aleykhem 1859~1916)、1978年にノーベル文学賞を受賞したシンガー(通称「シンガー」、Isaac Bashevis Singer 1904~91)など、優れた作家は多い。

通説では、イディッシュ語は10世紀頃を起源として、ユダヤ人が用いていた高地ドイツ語の方言から、セム語族のヘブライ語とアラム語の要素を交えて発達した。1215年の宗教会議で居住区域に制限されて「ゲットー」(ghetto)を形成し、ユダヤ教的色彩を強めた。とくに14世紀半ばにはペスト大流行の元凶として不当な迫害を受けるなどして、12~16世紀にかけてポーランド、ウクライナ、ベラルーシ、リトアニアなどへ大量移住し、スラブ語との密接な関係が生じた。ドイツとその周辺にとどまった西イディッシュ語は18世紀末に衰退し、やがて消滅した。現存するのは、移住先のスラブ語の影響下で発達した17世紀以降の東イディッシュ語である。

19世紀から20世紀初頭には旺盛な文学活動がなされ、標準語的な書き言葉が生まれた。1908年には、初めてのイディッシュ語会議がウクライナのチェルノヴィツで開かれ、社会的威信も高まった。話者はユダヤ人の約半数に及ぶ1,000万人を越えたが、その最盛期にナチスドイツによる500~600万人ともいわれる大量虐殺で激減し、旧ソ連のスターリン体制下でも弾圧を受

けた。

現在、イディッシュ語の話者数の確定は困難であり、イスラエルと北米を中心に 300～400 万人ともいわれ、全員が 2 言語使用者とされている。語彙は、大量の基礎語彙を含む約 75% がドイツ語を起源としている。一方、母音の長短の欠如、動詞のアスペクトの対立、ドイツ語に見られる「枠構造」の欠如など、種々のスラブ語的特徴が認められる。

さて、イディッシュ語を中高ドイツ語を起源とし、ヘブライ語やアラム語の要素を取り入れ、スラブ語の強い影響下で発達したとする従来通説にたいして、ゲルマン語ではないとする意見がある。テル・アヴィヴ大学のヴェクスラー (Paul Wexler) は、イディッシュ語はスラブ語起源であり、ドイツ語による「再語彙化」(relexification)、つまり大多数の語彙をドイツ語に置換して誕生したとする大胆な説を提唱した¹⁷。9～12 世紀頃に、西スラブ語に属するソルブ語を母語とするユダヤ人が、「東方植民」(3.2.) によって支配層となったドイツ人と密接に接触した。その結果、ドイツ語から大量の語彙供給を受け、文法構造は基層言語 (substratum) のスラブ語、語彙は上層言語 (superstratum) のドイツ語に変貌した。15 世紀を過ぎた頃、イディッシュ語はドイツ系ユダヤ人の大量移民によって、ベラルーシ南部とウクライナ北部にもたらされ、この地の東スラブ語 (キエフ・ポレスク方言 Kiev-Polesian) の話者であるユダヤ人の言語にたいして、再び大規模な語彙供給を行った。イディッシュ語はこの 2 段階の再語彙化 (two-tiered relexification) によって、系統的にはスラブ語だが、ゲルマン語的な装いをまとうに至ったという¹⁸。

この説には反論があるが¹⁹、再語彙化という概念は系統関係の査定に重要

¹⁷ Wexler (1991), (2002) 参照。

¹⁸ ヴェクスラーは現代ヘブライ語とポーランド人ザメンホフ (Ludwik Lejzer Zamenhof 1859～1917) が考案したエスペラント語についても、イディッシュ語の文法に前者はヘブライ語、後者はラテン語の語彙供給を行った結果とみなして、現代ヘブライ語と古代ヘブライ語の親縁関係を否定している。Wexler (2002: 3 f.) 参照。

¹⁹ Wexler (1991) に続く 8 人の研究者によるコメント (151-213 pp.) を参照。

な問いを投げかける。たとえば、アルバニア語はアルタイ語族に属するトルコ語、アルメニア語は印欧語族のイラン語派から、それぞれ大量の語彙を借用したために、かつては前者は非印欧語、後者はイラン語派の一員とみなされていた。極言すれば、借用語とそれ以外の「本来語」(相統語, native word)の間には、年代的相違しかないともいえる。たとえば、「ゲルマン語子音推移」以前にゲルマン語に借用された語彙は、ゲルマン語の本来語とされる可能性がある。基礎語彙の音韻対応を重視する歴史比較言語学の常識では、再語彙化が起こった言語は、「語彙供給言語」(lexifier)である上層言語の系統に分類されるだろう。しかし、急激な言語接触で誕生したビジンやクレール諸語の系統は、上層・基層言語の両方か、どちらにも属しないと判断せざるを得ない。ディアスポラ(diaspora)で世界中に離散したユダヤ人のイディッシュ語の起源と系統については、慎重な熟考を要する。

4.2. プラウトディーチ語 — シベリアから南米まで

もうひとつの例は、プラウトディーチ語(プ Plautdietsch)である。これは、低地ドイツ語の原語 Plattdeutsch[プラトドイチ(ユ) 'platdɔytʃ]に基づく名称である。16世紀前半の宗教改革期に、オランダのフリースラント出身で再洗礼派のメノ・シモンズ(Menno Simons 1496~1561)のもとに、オランダ、ドイツ、スイスから多数の信奉者が集まった。信奉者たちは北ドイツの東フリースラントを経て、ヴィスワ川下流のデルタ地帯に渡り、現在のポーランドのグダニスクを中心に定住した。ハンザ同盟都市でもあった同市には、中世末期にオランダ人やドイツ人が入植していた。入植者たちの当初の言語は一樣ではなかったが、同地で話されていた東低地ドイツ語低地プロイセン方言(ド Niederpreußisch)にオランダ語を交えた混成言語を発達させ、以下に記す事情から、後にスラブ語の要素が加わった。

1772年と1793年のポーランド分割によって、同地はプロイセンの支配下に落ち、状況が悪化した。入植者たちは、北ドイツの家系の女帝エカチェリーナ2世の招きで、露土戦争の勝利で獲得したロシア南部の開拓のために、1789年と1803/4年の2度にわたって、同地のホルティツァ(Chortitsa)とモロ

チュナ (Molochna) に移住した。人々は卓越した農耕技術で開拓地を広げたが、1870 年代の政策転換で情勢が暗転すると、カナダ、アメリカ合衆国、南米諸国に渡る者が続出した。1910 年から 1917 年のロシア革命直後にかけて、一部の人々はカザフスタンとの国境に近いシベリア南西部アルタイ地方のクルンダ・ステップ地帯 (Kulunda steppe) に向かった。当地の言語は「プラウトディーチ語アルタイ方言」(Altai dialect of Plautdiitsch/Plautdietsch) として、わずかに命脈を保っている²⁰。第二次大戦後、一部はドイツに帰還したが、同地に残った人々は敵国ドイツの憎むべき同胞として、極度の辛酸を経験した。

プラウトディーチ語の話し手は、450 年余りの間、メノ派 (メノー派) 教徒として宗教的アイデンティティを保ち、世界各地に離散している。正確な話者数は不明だが、およそ 40 万人程度とも見積もられ、約 15 万人が常用しているといわれる²¹。1987 年にはカナダの研究者による新約聖書の翻訳、2003 年には全訳も世に出ており、『星の王子様』(プ *Dee tjliena Prinz*) の翻訳もある²²。

4.3. ペンシルヴェニアドイツ語 — 宗教的アイデンティティの証

最後の例は、北米ペンシルヴェニア州とその周辺、さらにカナダや中南米でも用いられているペンシルヴェニアドイツ語 (ペ *Pennsylfaanisch-Deutsch*, 約 20~30 万人²³) である。話者のルーツは、ラインラント・プファルツ地方 (ド *Rheinland-Pfalz*) を中心に、1683 年からアメリカ独立戦争勃発の 1775 年までの移住にさかのぼる。ルクセンブルク語の南に隣接する中部ドイツ語ラインフランケン方言の中のプファルツ方言 (ド *Pfälzisch*) を基盤

²⁰ Nieuwboer (1999) 参照。

²¹ Epp (1993), Neufeld (2000) 参照。

²² Jack Thiessen 訳 (2002. Niederau. Verlag M. Naumann)。この題名は、フランス語原典の *Le petit prince* に準じた *Der kleine Prinz* 「小さな王子様」というドイツ語訳に対応している。

²³ Van Ness (1994 : 420) 参照。

とし、前舌円唇母音の非円唇化、「n の脱落」に類する現象など、ルクセンブルク語と共通点が多い。その他のドイツ語方言とも混交し、本国のどの方言とも異なっている。標準語化への試みもなされており、書き言葉としての機能も認められる。たんにドイツ語の方言とみなすことには、やはり問題があるといえる。

話者は英語との 2 言語使用者だが、世俗的なグループと再洗礼派に属する厳格なアーミシュ (Amish) およびメノ派 (メノー派) 教徒のグループに分かれる。中核をなすのは、現代文明から距離を置き、質素な伝統的生活様式を守る後者の人々である。ペンシルヴェニアドイツ語はその人々の宗教的アイデンティティ^{あかし}の証であり、高い出生率もあって強力な生命力を保持している。一方、大量移民が行われた 1720 年代からは、周囲の社会様式を受け入れるルター派新教徒の移住者が加わり、かつては話者の多数派を占めていた。しかし、アメリカ社会に溶け込んだ世俗的なグループに属するこの人々の間では、英語への移行が進行しており、話者は中高年齢層に限られ、とみに減少している。

ペンシルヴェニアドイツ語の実際の使用範囲は、内輪の口頭レベルにとどまる場合が多い。一方、かなりの文学的伝統を有していることも事実である。近年では、1993 年に新約聖書の翻訳がなされた。『星の王子様』(ペ *Der glee Prins*) の翻訳²⁴をはじめ、独自の正書法による書籍も少なからず刊行されている。

5. オランダ語とその仲間たち — 西ゲルマン語とその特徴 (3)

5.1. 標準オランダ語とフランドル方言 — 北部と南部の分離と連帯

蘭学を通じて江戸時代の日本に大きな恩恵をもたらしたオランダ語は、オランダ王国 (オ Koninkrijk der Nederlanden, 約 1,500 万人) とベルギー王国 (オ Koninkrijk België) の北半分にあたるフランドル地方 (オ Vlaanderen 「ヴラーンデレン」, 約 600 万人) をおもな使用地域とする。南半分は

²⁴ Mark L. Loudon 訳 (2006. Neckarsteinach. Edition Tintenfaß)

フロニー（ワロン）地方（オ Wallonië「ヴァローニエ」）といい、フランス語圏に属する。カトリック圏としてフランス語圏の影響を強く受けてきたオランダ語南部、すなわちフランドル地方にたいして、北部、すなわちオランダは、おもにカルヴァン派のプロテスタントに属し、国民性も異なっている。ブリュッセル（オ Brussel）首都圏は古くはオランダ語圏だったが、現在ではフランス語が優位に立つ2言語併用地区である。ここでいうフランドル地方とは、西フランドル州（オ West-Vlaanderen）と東フランドル州（オ Oost-Vlaanderen）にアントワープ州（オ Antwerpen「アントヴェルペン」）、ブラバント州、リンブルフ州を加えた総称である。「フランドル」（フラ Flandre）という名称はフランス語名だが、「フランドル絵画」などの歴史的名称としては、おもに東・西フランドル州を指す。前述のように、「オランダ」という名称は南・北ホラント州を指す地方名に由来し、歴史的にオランダ語圏は「ネーデルラント」と呼ばれる。

国境を越えて両国にまたがる南北両オランダ語圏の関係は、中世初期にさかのぼる。しかし、1555～1713年まで続いたスペイン、それに続くオーストリアによるネーデルラント南部支配と、八十年戦争（オランダ独立戦争 1568～1648）でオランダが勝利して、「ネーデルラント共和国」（オ Republiek der Verenigde Nederlanden 1648～1795）として独立を勝ち取った出来事を通じて、決定的に断たれてしまった。その後、ウィーン会議に決定で「統一ネーデルラント王国」（オ Verenigde Koninkrijk der Nederlanden 1815～30）が成立し、約2世紀半に及んだ分断の後に、再統一が実現した。しかし、南部では、この統一王国成立の当初からオランダ語重視の政策への反発が強く、わずか15年後の1830年に再び北部から袂を分かち、ベルギー王国として独立を宣言した。それ以来、オランダ語圏は二度と同一国家を形成することはなかった。この事情は、ドイツ語をめぐるドイツとオーストリアの関係に似ている。

標準オランダ語の礎石は、北部に中心地が移った17世紀以降に築かれた。17世紀の文豪たちの旺盛な執筆活動と並んで、重要な貢献は、オランダ議会の財政的援助を受けて1637年に大学都市レイデン（オ Leiden）で完成した

『欽定訳聖書』(オ *Statenbijbel*)である。全オランダ語使用地域で理解されることを目的としたこの大事業は、フリースラントを含むオランダ語圏各地から代表者を選出し、ホラント地方の方言を母体に、それ以前の聖書の翻訳に主として用いられた南部の方言も尊重する原則に基づいて、1627年に開始された。その全草稿は、ペストの蔓延のためにレイデンで約2万人の死者を出した悪夢の1635年に完成され、印刷にさらに2年を費やして、生き残った3人の翻訳者の中の2人の手によって、オランダ議会に献呈された。『欽定訳聖書』は最も権威あるオランダ語の規範として、教会での説教、学校教育、家庭での祈りなどを通じて、幅広い国民層に浸透した。

その後、18世紀を迎えると、オランダは対外貿易の特権をイギリスなど他の列強諸国に奪われ、零落の時代に入った。一方、長らくフランス語が優位に立っていた南部では、19世紀半ばになると、ロマン主義の高まりの中で、フランドル地方の言語文化を擁護する「フランドル運動」(オ *Vlaamse Beweging*)が起こり、南北連帯の機運が生じた。1849年には、「フランドル運動の父」と称えられるヴィレムス(Jan Frans Willems 1793~1846)の呼びかけで、第1回目の「オランダ語学文学会議」(オ *Nederlandsch Taal- en Letterkundig Congres*)がフランドル地方の古都ヘント(オ *Gent*)で開催されている。こうした動きの中で特筆すべき偉業は、デ・ヴリース(Matthias de Vries 1820~92)とテ・ヴィンケル(Lammert Allard te Winkel 1809~68)が1852年に編纂を開始し、約1世紀半に及ぶ努力を傾注して、1998年に完成された『オランダ語辞典』(オ *Woordenboek der Nederlandsche Taal, WNT*)である。これはスウェーデン・アカデミー(ス *Svenska Akademien*)による完結途上の『スウェーデン・アカデミー、スウェーデン語辞典』(ス *Svenska Akademiens ordbok, SAOB* 1898~)を別にすれば、グリム兄弟の『ドイツ語辞典』(ド *Deutsches Wörterbuch* 1854~1960)を量的に上回る世界的大辞典である。

1830年の独立宣言で誕生したベルギーは、その後もオランダ語圏とフランス語圏の対立を抱え続けた。オランダ語文化の擁護を目指していた初期のフランドル運動も、次第に政治的色彩を強めていった。後進地域だったオラン

ダ語圏はめざましい経済成長を遂げて、フランス語地域の優位性を崩す勢いを見せ始めた。こうして、言語問題がベルギー最大の内政問題になった。1912年に国王アルベール1世 (Albert I, 1875～1934, 在位 1909～1934) にたいして、側近の政治家が公開書簡を寄せ、「陛下、ベルギー人という者はおれません」(フラ “Sire, ... il n’y a pas de Belges.”) と述べたことは有名である。ただし、その意図は2つの国民の連邦から成るベルギーを目指すもので、今日の政治体制を先取りしていたともいえる。

その後、「1地域1言語の原則」(オ territorialiteitsbeginsel) を容認する動きが強まり、1963年には公式に表明されて、2年後にベルギーは4つの言語域に区画された。フランドル地方はオランダ語区、ワロニー地方はフランス語区、ベルギー東部に位置するマース川上流域(オ Overmaas)のオイペン(ド Eupen)とザンクト・フィート(ド St. Vith)はドイツ語区、ブリュッセル首都圏はオランダ語とフランス語の2言語区とされたのである。ブリュッセルは古くはオランダ語圏だったが、フランス語が優位に立つ2言語圏になっていた。1968年には、フランドル地方に置かれた同国最古のレーヴェン(オ Leuven)大学で、オランダ語部門とフランス語部門の対立が政治問題化し、フランス語部門はブラーバント州の南部、ワロニー地方の都市オティニ(フラ Ottignies)の新ルーヴァン(フラ Louvain-la-Neuve)に移転した。図書館の蔵書は離婚訴訟の財産分与さながらに、登録番号の奇数と偶数に従って機械的に配分された。1970年以降は統一国家から連邦国家への移行を進める憲法改正がなされ、1993年には南北の連邦制に移行して、ベルギーは新たな第一歩を踏み出した。

フランドル地方のオランダ語をフランス語名で「フラマン語」(フラ flamand, オ Vlaams「ヴラームス」)と呼ぶことがある。しかし、これは公的には独立の「言語」ではなく、「オランダ語フランドル方言(またはフラマン方言)」の総称である。オランダにも、同じように個性的な方言は少なくない。ただし、スイスドイツ語の説明で述べたように、標準ドイツ語には国別の「標準変種」があるとされるのに似て、標準オランダ語にも北部オランダと南部フランドル地方で別々の標準変種が存在するという見方も、不可能で

はない。南部フランドル地方のオランダ語を「南オランダ語」(オ Zuidnederlands) と称することがあるのは、この動きを反映している。オランダとベルギーのテレビニュースのアナウンサーの発音を聞けば、ドイツ語の場合と同じく、明確な差があることに容易に気がつく。ただし、異なる標準変種の認定には、積極的に具体的な言語政策をとる必要がある。1980 年には、両国政府間の協定によって、オランダ語の擁護と振興を促進する目的で「オランダ語連合」(オ Nederlandse Taalunie) が設立された。標準オランダ語の将来的には、同機関の指針が意味を持つことが予想される²⁵。

5.2. アフリカーンス語 — クレオール言語か否か

スペインに続いて、「陽の沈まない国」となった 17 世紀黄金時代のオランダだが、今に伝わる言語的痕跡は多くない。オランダ語は南米北部のスリナム (オ Suriname) とアンティレ諸島 (オ Nederlandse Antillen) の一部でも公用語とされ、オランダ語をベースにしたクレオール言語もいくつかある。最も特筆に値するのは、アフリカーンス語である。

オランダ人は、統一東インド会社が経営するアジアの植民地に至る中継点として、1652 年にアフリカ大陸南端のケープタウン (アフ Kaapstad 「カープスタット」) 周辺に入植した。アフリカーンス語は入植民の間で有力だったホラント方言を基盤とし、現地のコイコイ人 (旧称: ホッテントット) やサン人 (ブッシュマン) の言語 (コイサン語族)、当時のオランダ領インドネシアやアフリカの他の地域から連行した「奴隷」の言語 (マレー語、ポルトガル語のクレオール言語) の影響を受けて発達した。オランダ語から別個の言語として成立したのは、1775 年頃と見積もられている。北部に隣接するバントゥー語族や英語などの影響が強まるのは、1800 年以降のことである。書き言葉としての成立は、言語擁護運動の高まりから「真正アフリカーンス語話者協会」(アフ Genootskap van Regte Afrikaners, GRA) が結成された 1875 年とされており、「アフリカーンス語」(アフ Afrikaans) の名称もこのとき

²⁵ オランダ語の研究史と規範形成の歴史については、清水 (2010a) 参照。

に初めて用いられた。

アフリカーンス語は成立当初から、「白人」だけの言語ではなかった。統一東インド会社のオランダ語推進政策もあって、18世紀にヨーロッパ系自由民(オランダ系は総人口の36.8%にすぎない)、上記の「奴隷」、現地のコイコイ人などに共通の「ケープ・オランダ語」(オ Kaapsch Hollandsch)と呼ばれる話し言葉が発達し、アフリカーンス語の基礎になった。18世紀末のケープタウン周辺では、この3グループの人口はそれほど大差がなく、後者の2グループのアフリカーンス語話者はそれぞれ55%程度で、「白人」とその他の話者の割合は約1:1.1だったと推定されている。1808年の奴隷禁止令とドイツ人(18世紀の間に総人口の35%を占めた)などヨーロッパ系移民の流入を経て、20世紀には「白人」の話者数の割合が増大したが、近年では再びそれ以外の人々の比率が高くなっている。

オランダ系移民は「アフリカーネル」(アフ Afrikaner)と自称したが、農民(アフ boer)が大部分を占めたので、「ブール人」(「ボーア人」は英語読み)とも呼ばれた。その歴史は、先住民族との衝突に加えて、オランダ統一東インド会社が解散した1795年に来航したイギリス人との抗争の中で展開された。1806年に4千人余りのイギリス人がケープ植民地(アフ Kaapkolonie「カープ植民地」)を領有し、急激に人口を拡大し始めると、ブール人(1806年には約2万3千人)は圧迫を受けるようになった。そして、1830年代後半には「グレート・トレック」(Great Trek, アフ Groot Trek「フロアト・トレク」)と呼ばれる北東部への大規模な入植を行い、現在のトランスファール州(アフ Transvaal)とオレンジ自由国州(アフ Oranje Vrystaat「オラニエ自由国州」)を中心に定住した。なお、英語のtrek「トレッキング、徒歩旅行」はアフリカーンス語からの借用である。1860年代後半以降のダイヤモンドや金鉱の資源発見などによる経済変動、イギリスとの2度の「ブール戦争」(アフ Boereoorlog, ボーア戦争, 1880～1881, 1899～1902)を経て、1910年には大英帝国の自治領として認められ、1934年には正式に独立を達成した。

1850年頃以降、アフリカーンス語の地位は英語優位の状況下で転落した

が、上述の言語擁護運動の結果、書き言葉として確立し、1925年には英語とともに南アフリカ共和国（アフ Republiek van Suid-Afrika）の公用語として認められた。1933年には、聖書の翻訳が刊行されている。1994年の人種隔離政策（アパルトヘイト、アフ apartheid）の撤廃後、アフリカーンス語は同国の11の公用語の一角を担うようになった。

現在、アフリカーンス語はバントゥー語族に属するズールー語、コサ語について、人口の約1割にあたる約500万の母語話者を数える。1990年に同国から独立した北西部に隣接するナミビア（Namibia）の主要言語でもあり、両国の話者数は600万人以上にのぼる。約250万人の白人系アフリカーネルのほかに、以前は「カラード」（アフ kleuringe「クレアリング」）と呼ばれたケープ州（アフ Kaapprovinsie「カープ州」）を中心とする約300万の有色人種の人々が含まれる。ただし、両者の人種的区別は公的に撤廃されている。話者は最重要言語である英語との2言語使用者で、近年は政府の言語政策から英語の影響が増大している。公的擁護機関としては、1909年の創立にさかのぼる「南アフリカ共和国学士院」（アフ Suid-Afrikaanse Akademie vir Wetenskap en Kuns）に置かれた「言語委員会」（アフ Taalkommissie）が正書法の改正などに尽力している。

アフリカーンス語については、ケープ植民地の非オランダ語話者がオランダ語との接触で発達させた混成言語、つまりクレオール言語とみなす意見がある。たしかに、アフリカーンス語の話者は上記の異質な人々と共生する環境にあった。しかし、それにもかかわらず、他言語からの影響は驚くほど目立たない。アフリカーンス語の語彙は95%以上がオランダ語起源であり、英語の影響が増大し始める1806年以前に、1%以上の語彙を供給した他の言語は存在しない。標準オランダ語と異なる音韻的特徴は、基盤となったホラント方言を色濃く反映している。一般にクレオール化は、30年ほどの間に臨時的な意思疎通手段である「ピジン言語」（pidgin）が発達し、第1言語となることを前提とするが、アフリカーンス語にはそれほど短期間での急激な変貌は認められず、ゲルマン語的性格が広範に保たれている。形態面では、英語をしのぐ強い変化を被った。アフリカーンス語には名詞の性や格変化、動詞

の人称変化はまったくなく、現在形と過去形の区別もない。これは非オランダ語話者による不十分なオランダ語習得の影響を受けて、余剰的な形態的特徴が簡素化された結果と考えられる²⁶。

6. 英語とフリジア語群 — 西ゲルマン語とその特徴 (4)

6.1. フリジア語群 — 北海ゲルマン語唯一の後裔

フリジア語は北海ゲルマン語唯一の後裔とされている。古ザクセン語はドイツ語方言に下り、英語は大変革を遂げた。社会的威信言語に囲まれた現況にあって、フリジア人としての証は第一にフリジア語にある。ただし、フリジア語はオランダと北ドイツの3箇所に分散し、共通の標準語を欠いた言語群であり、それぞれ当地の主要言語から強い影響を受けてきた。西・東・北に分かれるフリジア語話者の相互理解は不可能で、各自が母語をたんに「フリジア語」と称している。

最も話者が多いのは、オランダ北部フリースラント州(約64万2千人)をホームランドとする西フリジア語(西フ Westerlauwersk Frysk)である。対岸の西フリジア諸島の2つの島にも、話者がいる。現在の西フリジア語の話者数は約35~40万人と見積もられているが、厳密な数値の確定は困難である。約32万人を数えるアイスランド語よりも話者が多いことになるが、単一言語使用者であるアイスランド人と異なって、西フリジア語話者は全員がオランダ語との2言語使用者であり、言語能力に差がある。1994年の統計では、州人口の約94%が「聞く」、約74%が「話す」、約64%が「読む」、約17%が「書く」能力があると申告している。ただし、生涯をこの地で過ごす人々は決して多くない。話者がフリースラント州以外に移住した場合、子供に西フリジア語を伝えるのは容易ではない。この事情は、西および東フリジア語でも同様である。

16世紀以降は公的機能をオランダ語に譲ったが、そのような状況にあって、ギスベト・ヤーピクス(Gysbert Japicx 1603~1666)は芸術性の高い『フ

²⁶ Raidt (1983) 参照。

リジア詩集』(西フ *Friesche Rymlerye* 1668 (増補版 1681))を残した。19世紀ロマン主義の時代には、ホルベツマ (Halbertsma) 3兄弟が『フリジア民謡集』(西フ *Rimen en Teltsjes* 1871)を編纂するなどして、現在に至るまで豊かな文学を生み出してきた。ただし、聖書の翻訳は遅く、新約聖書は1933年、全訳の刊行は1978年である。

公的には、西フリジア語は1955年にオランダの地域的公用語に認定された。1928年に設立された「フリジア語教育委員会」(西フ *Afûk, Algemiene Fryske Underrjocht Kommissje*)は、多数の教材や関連図書を刊行し、各種の講習を行っている。1938年にはオランダ学士院の関連機関として「フリスケ・アカデミー」(西フ *Fryske Akademy*)が設立され、オランダ語との対訳による全25巻の『西フリジア語辞典』(西フ/オ *Wurdboek fan de Fryske taal/Woordenboek der Friesche taal* 1984~2011)を完成させた。2008年には初の西フリジア語の解説による2巻本の『西フリジア語中辞典』(西フ *Frysk hânwurdboek*, xxii+2,391pp.)を世に送っている。西フリジア語には方言差はある程度、認められるが、意思疎通を阻害するほどではない。東部の「ヴォーデン地方」(西フ *Wâlden*, 「森林」の意味)にたいして、西部の「クライー地方」(西フ *Klaai*, 「泥炭地」の意味)の方言が標準語の基盤になっている。

東フリジア語は、北ドイツ東部の東フリースラントでは、もはや用いられていない。大陸部では、遅くとも1800年以降、東フリジア諸島では、東端のヴァンガーオーゲ島(ド *Wangerooge*)で1950年頃に、それぞれ低地ドイツ語東フリースラント方言に移行した。現在の東フリジア語の使用地域は、東フリースラントの外側の南東方向に位置する「ザーターラント」(ド *Saterland*, 東フ *Seelterlound*「セールターロウンド」, 約123 km², 約12,000人)の3つの村である。「ザーターフリジア語」(ド *Saterfriesisch*, 東フ *Seeltersk*)ともいうが、この名称のほうが当を得ている。「東」という区分は中世初期の地理的分布に基づくもので、現状にそぐわない。

東フリジア語、すなわちザーターフリジア語の話者は、現在、おおまかに1,500~2,500人程度と見積もられている。話者はほとんどすべて、標準ドイ

ツ語、低地ドイツ語との3言語使用者である。その起源は、1100～1400年頃に風雨と津波の襲来で故郷を追われた東フリジア人の定住にさかのぼる。19世紀までこの地は通行不能な沼地に囲まれ、隔絶されていた。1800年のドイツ人牧師の旅行記には、「神の天地創造は、この地ではまだ未完結のように見える」として、厳しい自然環境が陰惨に描写されている。最古の文献は、1812年の新約聖書の「放蕩息子の帰宅」の翻訳である。標準語は未確立で、正書法は2人の研究者による2種類がある。2000年にはその一人で、アメリカ出身の黒人の言語学者フォート博士 (Marron Curtis Fort) による新約聖書全体と詩篇の翻訳が刊行された。正式な公的擁護機関はなく、北フリジア語とともに絶滅が危惧される危機言語に指定されている。

北フリジア語 (北フ Nordfriisk) の使用地域は、「言語のモザイク」として知られている。北ドイツのシュレースヴィヒ・ホルシュタイン州北西部、北フリースラント郡 (北フ Nordfriislon/ド Nordfriesland, 約 2,049 km², 約 16 万人) のフーズム (ド Husum) 以北からデンマーク国境までの大陸沿岸と島、それにヘルゴラント島がそれである。とくにこの地域の北部では、北フリジア語を構成する下記の9方言に加えて、標準ドイツ語、低地ドイツ語、標準デンマーク語、デンマーク語南ユトランド方言 (デ sønderjysk) が飛び交っている。ただし、近年は北フリジア語話者の多言語使用にも陰りが差し、標準ドイツ語が全域を覆っている。話者数の特定は困難で、9千～1万人程度とされている。しかし、これは、個々の方言について異なる年代の統計を総合した結果にすぎない。言語能力の差も大きく、6～8千人程度と見積もる意見もある。北フリジア語全体は移住時期の違いから、次の3つの島方言と6つの大陸方言に分かれる。

① 島方言

フェリング・エームラング方言 (北フ ferīng-öömrang, フェーア島 (ド Föhr), アムルム島 (ド Amrum))²⁷

²⁷ フェリング方言 (北フ ferīng) とエームラング方言 (北フ öömrang) に分かれるが、共

セルリング方言（北フ Sölring, ジュルト島（ド Sylt）

ハルンデ方言（北フ Halunder, ヘルゴラント島（ド Helgoland）

② 大陸方言

ベーキングハルデ（ド Bökingharde）方言（＝モーリング方言，北フ mooring）

ヴィーディングハルデ（ド Wiedingharde）方言，北ゴースハルデ（ド Nordergoesharde）方言

中部ゴースハルデ（ド Mittelgoesharde）方言

カルハルデ（ド Karrharde）方言

ハリゲン（ド Halligen）方言

北フリジア語は標準語を欠く 9 方言の集合であり、たがいに相違が激しく、方言間の意思疎通は容易ではない。「青」を意味する大陸方言 ween/wjin/weeden（ド Waid「大青，青色染料」）↔島方言 blä/blö/bli（英 blue）のように、明確な分布ばかりとは限らない。「祖父」を表す語は、西フリジア語 pake，東フリジア語 Bääsjebaabe にたいして、北フリジア語は上記の方言順に，ualaatj/Gooki/Groofoor/âte/aaltääte/aalfååje/olfaar/åltääte/ualbaabe とすべて異なっており，しかもドイツ語式の大文字書きとデンマーク語式の小文字書きが混在している。これにはザーターラントに似て，19 世紀までは外界との接触が乏しい通行困難な沼地で，北海の荒波を受け，中心地を発達させなかった点が大い。人々はデンマーク語，低地ドイツ語，標準ドイツ語に囲まれながらも，母語を内輪の言語として役割分担を守ってきた。最古の文献は，1600 年頃のルターの教理問答の翻訳である。聖書の翻訳は，新約聖書と詩篇のセルリング方言訳（1862～70）のほかは，部分訳にとどまる。話者数は中世には最大で約 5 万人に及んだとされているが，19 世紀半ばには 3 万人弱，1925 年には約 15,000 人に減少した。衰退はとくに大陸南部で

通点が多いので，フェリング・エームラング方言にまとめることが多い。日本語によるモーリング方言の記述については，清水（1992），（1994），（2010b）参照。

激しく、最南端の南ゴースハルデ（ド Nordergoesharde）方言は 1980 年頃に消滅した。

言語擁護は 19 世紀以来、旺盛に展開されてきた。1964 年設立の公的機関「北フリジア語文化研究所」（北フ Nordfriisk Instituut）は、数々の研究教育資料を公刊している。島方言ではフェリング・エームラング方言、とくにフェリング方言（約 1,600 人、住民の約 39.6%）、大陸方言ではモーリング方言（約 2,500 人、同約 22%）が教材が豊富で学びやすい。辞書編集は伝統的に活発に行われ、方言別に相当数にのぼる。しかし、北フリジア語全体を包括する辞書は、いまだに刊行されていない。学校教師で教会職員だったモーリツ・モメ・ニセン（Moritz Momme Nissen 1822～1902）による歴史言語学的原則に貫かれた『北フリジア語辞典』（ド *Nordfriesisches Wörterbuch*）は、膨大な草稿のまま目の目を見ずに眠っている。

6.2. 英語 — なにかとやっかいな国際語

アフリカーンス語と並んで、ゲルマン語の中でもとくに大規模な形態的簡素化を経た英語は、ドイツ語などに比べて学びやすいともいわれる。しかし、じつは、英語ほど習得困難な外国語は稀である。そのおもな原因に、歴史的経緯でもたらされた圧倒的な語彙の豊富さがある。いつになっても辞書が手放せない。英語は世界で最も豊かな語彙をもつ言語のひとつとされている。語彙の数えかたはさまざまだが、専門用語を除く総語彙数は、フランス語約 10 万語、ドイツ語約 20 万語にたいして、英語では約 50 万語ともいわれている。今日、世界中の言語が英語から借用を行っているが、近代以降、英語は世界の諸言語から語彙を借用してきた。ただし、音韻体系は影響が少なく、基礎語彙の多くはゲルマン語起源である。古来のゲルマン語彙は 25%程度で、約 50%を占めるフランス語およびラテン語からの借用語の半分ほどだが、総語彙数が多いので少なく感じるだけで、使用頻度が低い語を含めてごっそり残っている。

英語はデンマーク語とならんで、聞き取りにくいゲルマン語の代表格でもある。聞き取れても、正しくつづれるとは限らない。発音と正書法が極度に

一致しないからである。アクセントの位置も予測しがたい。アクセントの位置にかんする規則は存在するが、複雑で例外が多いので、慣れるしかない。作家の G. B. ショー (George Bernard Shaw 1856~1950) が英語のつづりの不整合さを皮肉って、「魚」を *ghoti* とつづろうと提案したことは、よく知られている (*tough+women+na**t**ion*)。アルファベットは 26 文字だが、個々の語が独自のつづりを示すので、漢字に似て、単語の数ほど文字があるような煩わしさがつきまとう。

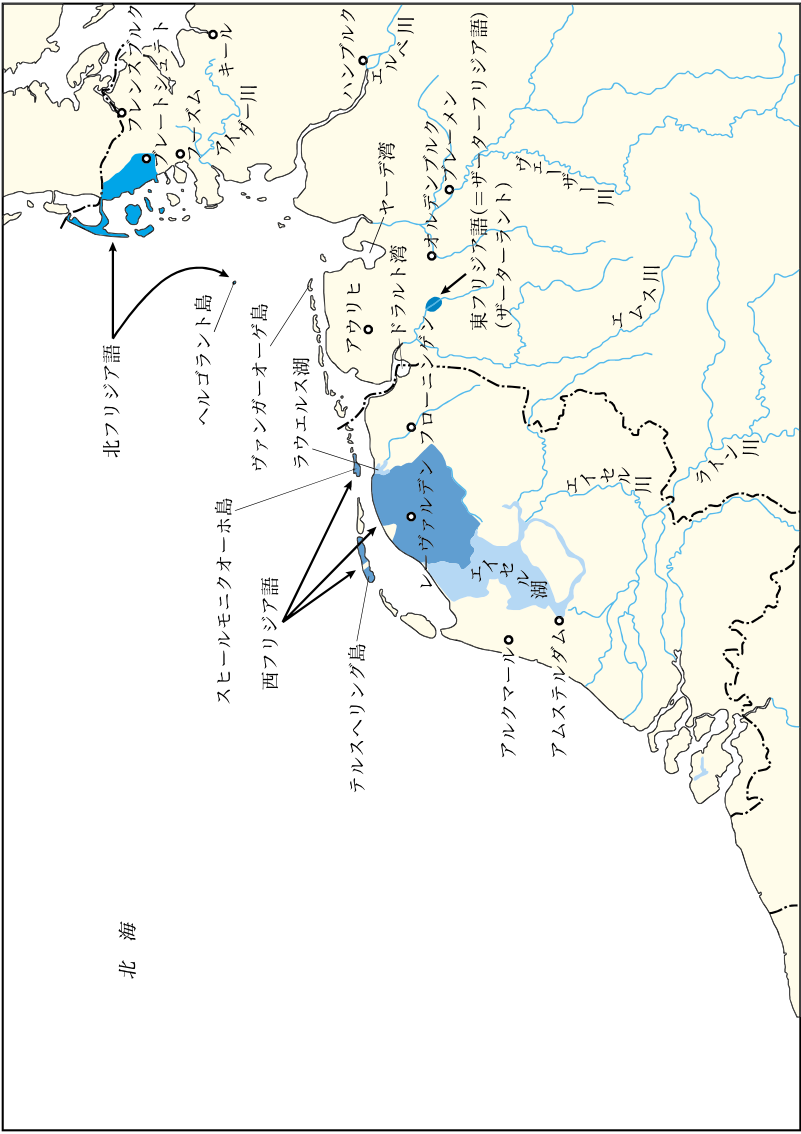
これには正書法改革が遅れた事情のほかに、構造的要因も大きい。*night* [naɪt] 「夜」、*psalm* [sɑ:m] 「賛美歌」、*debt* [det] 「借金」などの黙字は排除できたとしても、*compare* [kəm'peə] 「比較する」—*comparative* [kəm'pæɪətɪv] 「比較による」—*comparable* ['kæmpərəbəl] 「比較できる」、*define* [dɪ'faɪn] 「定義する」—*definite* ['def(ə)nət] 「確定した」—*definitive* [dɪ'fɪnətɪv] 「確定的な」のようなアクセントの交替による母音の変異は、どう処理するべきか。この例では、有アクセントの a/i は、語末音節では歴史的に長母音に由来する [eə]/[aɪ]、それ以外は短い [æ]/[ɪ] として現れ、無アクセント音節ではあいまい母音 [ə] または無音に弱まっている。その他の多くのゲルマン語と違って、英語では、アクセントの交替の影響が母音の長短の交替だけにとどまらないのである。現代国際社会を席卷する英語では、社会的影響への懸念からも正書法改革がますます困難になっている。

ゲルマン語の歴史と構造 (5)

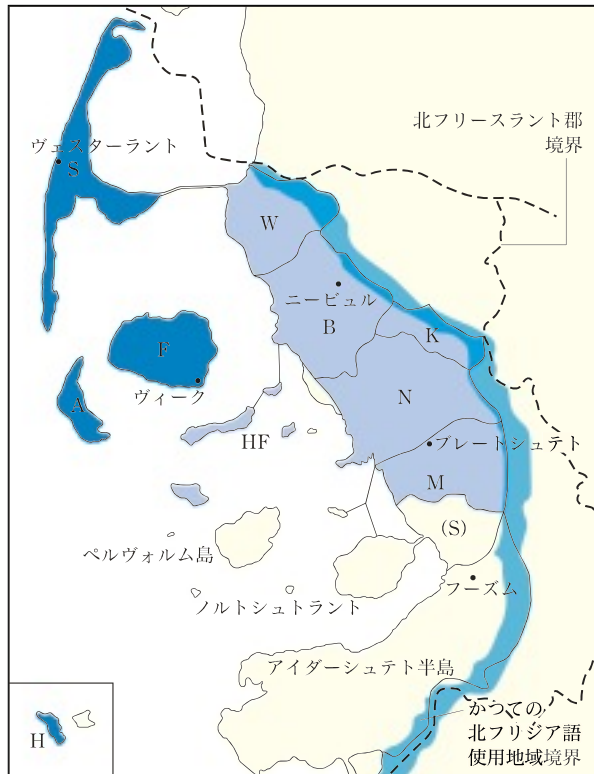


地図1 オランダ語の使用地域

(清水 2004: 18 一部変更, 地名表記はオランダ語とフランス語による)



地図 2 フリジア語群の使用地域 (清水 2006 : 752 一部変更) 出所) Munske 2001 : 表紙裏



- | | |
|------------------------------|------------------------------------|
| ■ 大陸方言 | ■ 島方言 |
| W ヴィーディングハルデ方言 | S セルリング方言(ジュルト島) |
| B ベーキングハルデ方言
(モーリング方言) | F-A フェリング・エムラング方言
(フェーア島・アムルム島) |
| K カルハルデ方言 | H ハルンデ方言(ヘルゴラント島) |
| N 北ゴースハルデ方言 | |
| M 中部ゴースハルデ方言 | |
| (S) 南ゴースハルデ方言
(1980 年頃死滅) | |
| HF ハリゲン方言(ハリゲン諸島) | |

出所：Steensen 1994：14, 地名はドイツ語名

地図 3 北フリジア語の使用地域 (清水 2006：763 一部変更)

出所) Steensen 1994: 14, 地名はドイツ語名

略語一覧

本文中で言語名を示していない原語は英語による。術語にはなるべく英語をあてるが、説明の都合上、その他の言語で示すことがある。

ア：アイスランド語，アフ：アフリカーンス語，アル：ドイツ語アルザス方言，アルメ：アルメニア語，イ：イディッシュ語，イタ：イタリア語，印欧：印欧祖語，英：英語，オ：オランダ語，ギ：(古典)ギリシャ語，北フ：北フリジア語，ゲ：ゲルマン祖語，ゴ：ゴート語，古英：古英語，古オ：古オランダ語，古高ド：古高ドイツ語，古ザ：古ザクセン語，古ノ：古ノルド語，古フ：古フリジア語，ス：スウェーデン語，スコ：英語スコットランド方言，スペ：スペイン語，ザ：(西)低地ドイツ語北低地ザクセン方言，チュ：スイスドイツ語チューリヒ方言，中英：中英語，中高ド：中高ドイツ語，デ：デンマーク語，ド：ドイツ語，西フ：西フリジア語，西ユ：デンマーク語西ユトランド方言，ニュ：ノルウェー語ニューノシュク，ノ：ノルウェー語，ハ：北フリジア語ハルンデ方言，バ：スイスドイツ語バーゼル方言，東フ：東フリジア語，フ：フリジア語，プ：ノルウェー語ブークモール，プ：プラウトディーチ語，フィ：フィンランド語，フェ：フェーロー語，フェリ：北フリジア語フェリング（・エームラング）方言，フラ：フランス語，ベ：スイスドイツ語ベルン方言，ペ：ペンシルヴェニアドイツ語，ポ：ポーランド語，メ：(東)低地ドイツ語メクレンブルク・フォアポマーン方言，モ：北フリジア語モーリング方言，リ：リトアニア語，ル：ルクセンブルク語，ロ：ロシア語

参考文献（前回までに挙げたものは除く）

Ammon, Ulrich et al. (Hg.) 2004. *Variantenwörterbuch des Deutschen. Die Standardsprache in Österreich, der Schweiz und Deutschland sowie in Liechtenstein, Luxemburg, Ostbelgien und Südtirol*. Berlin. de Gruyter.

- Bidese, Ermenegildo 2008. *Die diachronische Syntax des Zimbrischen*. Tübingen. Narr.
- Bremmer, Rolf H. Jr. 2009. *Introduction to Old Frisian*. Amsterdam/Philadelphia. Benjamins.
- Brunner, Jean-Jaques. 2001. *L'alsacien sans peine*. Chennevières-sur-Marne Cedex. Assimil.
- Christiansen, Hallfrid. 1946-48. *Norske dialekter I-III*. Oslo.
- Elmentaler, Michael. 2009. „Hochdeutsch und Platt — zwei ungleiche Nachbarn“. Elmentaler, Michael (Hg.). *Deutsch und seine Nachbarn*. Frankfurt am Main et al. Peter Lang. 31-45.
- Epp, Reuben. 1993. *The Story of Low German & Plautdietsch*. Hillsboro, Kansas. The Reader's Press.
- Greyerz, Otto von/Bietenhard, Ruth. 1997⁶. *Berndeutsches Wörterbuch für die heutige Mundart zwischen Burgdorf, Lyss und Thun*. Muri bei Bern. Cosmos Verlag.
- Haspelmath, Martin/Dryer, Matthew S./Gil, David/Comrie, Bernard (eds.). 2005. *The World Atlas of Language Structures*. Oxford et al. Oxford University Press.
- Haugen, Einar 1976. *The Scandinavian Languages. An Introduction to their History*. London. Faber and Faber.
- Hermann-Winter, Renate. 2006. *Hör- und Lesebuch für das Plattdeutsche*. Rostock. Hinstorff.
- Höskuldur Thráinsson/Hjalmar P. Petersen/Jógvan í Lon Jacobsen/Zakaris Svabo Hansen. 2004. *Faroese. An Overview and Reference Grammar*. Tórshavn. Føroya Fróðaskapafelag.
- Jakobsen, Jakob. 1928-32. *An Etymological Dictionary of the Norn Language in Shetland*. (1985 復刻 AMS Press. New York)
- Marti, Werner. 1985. *Berndeutsche Grammatik*. Bern. Francke.
- Meillet, Antoine. 1948. “Le genre grammatical et l'élimination de la flexion”. *Linguistique historique et linguistique générale*. Paris. Librairie Ancienne Honoré Champion.
- Meillet, Antoine. 1949. *Caractères généraux des langues germaniques*. Paris. Librairie Hachette.
- Merkle, Ludwig. 1990⁴ (1975). *Bairische Grammatik*. München. Hugendubel.
- Millward, C. M. 1996² (1988). *A Biography of the English Language*. Boston. Thomson/Wadsworth.
- Moen, Per/Pedersen, Per-Bjørn. 1998. *Engelsk-norsk/Norsk-engelsk ordbok*. Oslo. Det Norske Samlaget.
- Neufeld, Eldo. 2000. *Plautdietsch Grammar*. München. Lincom Europa.

- Niebaum, Hermann/Macha, Jürgen. 1999. *Einführung in die Dialektologie des Deutschen*. Tübingen. Niemeyer.
- Nielsen, Hans Frede. 2000. *The Early Runic Language of Scandinavia*. Heidelberg. Winter.
- Nieuwboer, Rogier. 1999. *The Altai Dialect of Plautdiitsch*. München. Lincom Europa.
- Norde, Muriel. 2009. *Degrammaticalization*. Oxford/New York. Oxford University Press.
- Paul, Hermann/Mitzka, Walther. 1966¹⁸ (1881). *Mittelhochdeutsche Grammatik*. Tübingen. Niemeyer.
- Raidt, Edith H. 1983. *Einführung in Geschichte und Struktur des Afrikaans*. Darmstadt. Wissenschaftliche Buchgesellschaft.
- Rendboe, Laurits. 1987. *Det gamle shetlandske sprog. George Low's ordliste fra 1774. NOWELE Supplement Vol.3*. Odense University Press.
- Skjækkeland, Martin. 1997. *Dei norske dialektane*. Kristiansand. Høyskoleforlaget.
- Steenen, Thomas. 1994. *The Frisians in Schleswig-Holstein*. (Edited by the Frisian Council). Bräist/Bredstedt, NF. Nordfriisk Instituut.
- Suter, Rudolf. 1984. *Baseldeutsches Wörterbuch*. Basel. Christoph Merian Verlag.
- Suter, Rudolf. 1992³ (1976). *Baseldeutsch-Grammatik*. Basel. Christoph Merian Verlag.
- Thies, Heinrich. 2010. *Plattdeutsche Grammatik*. Neumünster. Wachholtz.
- Torp, Arne. 2002² (1998). *Nordiske språk i nordisk og germansk perspektiv*. Oslo. Novus.
- Tyroller, Hans. 2003. *Grammatische Beschreibung des Zimbrischen von Lusern. ZDL-Beiheft 111*. Wiesbaden. Steiner.
- Van Ness, Silke. 1994. "Pennsylvania German". König/Van der Auwera (eds.). 420-438.
- Vikør, Lars S. 1995. *The Nordic Languages*. Oslo. Novus.
- Weber, Albert/Bächtold, Jaques M. 1983³ (1961). *Zürichdeutsches Wörterbuch*. Zürich. Verlag. Hans Rohr.
- Weber, Albert. 1987³ (1948). *Zürichdeutsche Grammatik*. Zürich. Verlag Hans Rohr.
- Wexler, Paul. 1991. "Yiddish — The Fifteenth Slavic Language. A Study of Partial Language Shift from Judeo-Sorbian to German". *International Journal of the Sociology of Language* 91. 9-150.
- Wexler, Paul. 2001. *Two-tiered Relexification in Yiddish. Jews, Sorbs, Khazars, and the Kiev-Polessian Dialect*. Berlin/New York. Mouton de Gruyter.

熊坂 亮 2011『スイスドイツ語——言語構造と社会的地位』北海道大学出版会。
 リングゴー, K. (清水 誠 訳) 1995「デンマーク語方言概説」(Ringgaard, R. *Danske*

- dialekter—en kortfattet oversigt*. 1973²) 『ノルデン第 32 号』(ノルデン刊行会, 北海道大学言語文化部) 31-105
- 清水 誠 1983「スウェーデン語に与えたドイツ語の影響」『東京大学教養学部言語文化センター紀要第 4 号』1-24
- 清水 誠 1992「北フリジア語モーリング方言 (1). 文法——V. Tams Jørgensen: *Kort spräkeliir foon dāt mooringen fräsch* 訳注」『北海道大学文学部紀要 40-3』65-162
- 清水 誠 1994「北フリジア語モーリング方言の音韻」(千石 喬/川島淳夫/新田春夫(編)『ドイツ語学研究 2』クロノス) 445-503
- 清水 誠 2004『現代オランダ語入門』大学書林.
- 清水 誠 2006『西フリジア語文法——現代北海ゲルマン語の体系的構造記述』北海道大学出版会.
- 清水 誠 2009『北歐アイスランド文学の歩み——白夜と氷河の国の六世紀』現代図書.
- 清水 誠 2010a「オランダ語研究の歴史と言語規範の形成」(北海道大学大学院文学研究科言語情報学講座編『言語研究の諸相』北海道大学出版会) 183-252.
- 清水 誠 2010b, 「フリジア語」(町田 健『ニューエクスプレス・スペシャル ヨーロッパのおもしろ言語』白水社) 68-87.
- 清水 誠 2011「アイスランド語の音韻とカナ表記」(清水 誠(編)『アイスランドの言語, 神話, 歴史——日本アイスランド学会 30 周年記念論文集』麻生出版) 49-106.
- 田中克彦 1981『ことばと国家』岩波書店.

* 本稿は以下の拙稿の続編である。

「ゲルマン語の歴史と構造 (1)——歴史言語学と比較方法——」(北海道大学文学研究科紀要 131. pp.1-40. 2010)

「ゲルマン語の歴史と構造 (2)——ゲルマン祖語の特徴 (1)——」(北海道大学文学研究科紀要 134. pp.31-67. 2011)

「ゲルマン語の歴史と構造 (3)——ゲルマン祖語の特徴 (2), 古ゲルマン諸語 (1)——」(北海道大学文学研究科紀要 135. pp.41-88. 2011)

「ゲルマン語の歴史と構造 (4)——古ゲルマン諸語 (2)——」(北海道大学文学研究科紀要 136. pp.53-101. 2012)

なお, 以上の拙稿は, 一部を大幅に縮約・改訂し, 未発表部分を新たに追加して, 『ゲルマン語入門』(三省堂 2012)として出版される予定である。

* 本研究は科研費（21520425）の助成を受けたものである。

* 誤植訂正：

「ゲルマン語の歴史と構造 (2) — ゲルマン祖語の特徴 (1) —」

35 頁 上から 17 行目 /xw/, /hw/→/xʷ/, /hʷ/

注 6 唇歯→歯

39 頁 注 6 /pʰ/→/bʰ/, 無声の→有声の

41 頁 上から 15 行目 frātēr → frátēr

注 12 dinstinctive → distinctive

42 頁 上から 7 行目 ギ frātēr →ギ frátēr

上から 12 行目 ゲ *brōpēr →ゲ *brópēr

下から 6 行目 ゲルマン語子音推移だけを経て：削除

下から 5 行目 ヴェアナーの法則も被り→それに加えて

45 頁 上から 3 行目 ゲ *brōpēr →ゲ *brópēr

上から 4 行目 *bʰrah₂-→*bʰrah-

62 頁 上から 2 行目 *dʰē-/ *dʰē-→*dʰē-

下から 3 行目 ゴ→古高ド

「ゲルマン語の歴史と構造 (3) — ゲルマン祖語の特徴 (2), 古ゲルマン諸語 (1) —」

57 頁 上から 12 行目 null grade → zero grade

59 頁 上から 6 行目 pō → sō/pata

67 頁 下から 9 行目 ゴート人に続いて故地を離れ：削除

72 頁 上から 15 行目 Busbeque → Busbecq

79 頁 下から 1 行目 3 番目→後半

83 頁 下から 6 行目 ニューファウンドランド島→ニューファンドランド島

85 頁 上から 11 行目 gutniska → gotländska

「ゲルマン語の歴史と構造 (4) — 古ゲルマン諸語 (2) —」

58 頁 上から 12 行目 bidon—biten → biton—(ǵe)biten

下から 4 行目 færð → færþ

67 頁 下から 11 行目 *pratice* → *practice*

ゲルマン語の歴史と構造 (5)

75 頁 上から 7 行目 アレマン方言とバイエルン方言→高地アレマン方言と南部のバイエルン方言

下から 10 行目 wer(o)rc → we(o)rc

77 頁 下から 11 行目 χ /x/ → x /x/

80 頁 上から 8 行目 摩擦音＞破擦音→閉鎖音＞摩擦音・破擦音

82 頁 上から 6 行目 「行間逐語訳」(interlinear translation)→行単位の逐語訳

94 頁 地図 11 エアフルト→エルフルト